常澄村文化財調査報告　第３集

# 大串遺跡

(仮称)大串貝塚周辺におけるふれあいの
まちづくり事業計画予定地の調査報告

茨城県常澄村教育委員会

平成元年十月

# 序

私たちの常澄村には，原始古代からの先人たちが遺した歴史や文化と，その遺産である考古学上重要な遺跡が数多く現存しております．その中でも特に国指定史跡大串貝塚は，西歴713年の『常陸国風土記』に記されており，文献に遺る貝塚として世界最古の，わが国を代表する遺跡として古くから注目されてきました．

本村では，昭和48年６月に文化財保護条例を施行し，これらの埋蔵文化財の持つ意義や重要性をふまえ，遺跡の現状を保存しながら後世に伝えていくことを責務と考え，対応に努力してきたところであります．近年，都市化により生活環境の整備や変化に伴う開発や造成が急増する中で，こうした貴重な遺跡の現状維持保存は困難になりつつありますが，このたび，埋蔵文化財包蔵地としての可能性の高い大串遺跡周辺一帯を（仮称)『大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり事業計画地』として整備することになり，同事業区域の埋蔵文化財確認調査を実施した次第であります．

調査につきましては，事前に充分な検討を重ね，茨城県教育庁文化課ならびに水戸教育事務所よりご指導・ご助言をいただき，日本考古学協会員井上義安氏の手で約１ケ月半にわたり実施いたしました．調査の結果，区域内から古墳時代の集落跡及び数多くの遺物等，この地域における古代人の生活の一端を知る上でのたいへん貴重な資料を得ることができました．そして本書が，遠き祖先の偉業を偲び，かけがえのない貴重な文化財に対する認識と遺跡愛護の精神を培う上で，広くご活用いただければ幸いに存じます．

終わりに，本調査と本書の作成にあたり，ご尽力いただきました井上義安先生をはじめ，調査関係者の方々，ご指導・ご協力をいただきました茨城県教育庁文化課ならびに水戸教育事務所の諸先生方，その他数多くの関係者の皆様方に対し，心から深甚なる感謝を申し上げる次第であります．

平成元年９月

常澄村教育委員会

教育長　**中　村　　政**

# 例　　言

1　大串遺跡は，茨城県東茨城郡常澄村塩崎に所在する．

2　本調査は，(仮称)『大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり』に伴なう確認調査である．

3　確認調査は，昭和63年11月25日に開始し，平成１年１月21日に終了した．

4　確認調査の面積は約3,000㎡である．

5　確認調査は，常澄村教育委員会が井上義安を発掘担当者とし，大芦あさ・水谷　正・小堤静江・鈴木浩子（調査補助員）の協力を受けて実施した．

6　本書に掲載した写真は，井上義安・内藤　彰が撮影したものである．

7　石器類の材質は，一部のものにつき茨城大学理学部地球科学科の斉藤登志雄・田切美智雄の両教授に鑑定を依頼した．

8　遺物の整理と図面の作成は，発掘終了後，大洗町髭釜遺跡調査団事務所，常澄村文化財収蔵庫，那珂湊市檜原神宮社務所を使用して行った．

9　出土遺物は，常澄村教育委員会の責任で保管されている．

10　接合資料は，出土地点番号（遺物番号と同一），表裏関係（表△・裏▽・立ち▷），床上レベル（計測単位cm）の順で記載した．

11　住居址内出土遺物の種類を次の記号で区別した．

●土師器・■縄文土器・○紡錘車・◎土錘・□管玉・□鉄製品・△軽石・▲自然石

# 目　次

序　　常澄村教育委員会 教育長　中　村　　政
例　　言
目　　次
挿図目次
図版目次
第 一 章　はじめに……1
第 二 章　遺跡の位置と環境……2
第 三 章　発掘調査の概要……4
第 四 章　第二調査区の遺構と遺物……8
　1　第一号住居址……8
　2　第二号住居址……13
　3　第三号住居址……16
　4　第四号住居址……22
　5　第五号住居址……27
第 五 章　第三調査区の遺構と遺物……31
　1　第一号土壙……31
　2　第二号土壙……31
　3　周　溝……33
第 六 章　まとめにかえて……34
発掘調査関係者

# 挿 図 目 次


第 一 図　大串遺跡付近地形図……3
第 二 図　調査区配置図……5
第 三 図　第一調査区遺構分布図……6
第 四 図　第二調査区遺構分布図……7
第 五 図　第一号住居址実測図……9
第 六 図　第一号住居址接合関係図・貯蔵穴・炉址実測図……10
第 七 図　第一号住居址出土遺物実測図(1)……11
第 八 図　第一号住居址出土遺物実測図(2)……12
第 九 図　第二号住居址実測図・接合関係図……13
第一〇図　第二号住居址出土遺物実測図……14
第一一図　第三号住居址実測図……17
第一二図　第三号住居址接合関係図・柱穴・貯蔵穴実測図……18
第一三図　第三号住居址出土遺物実測図……19・20
第一四図　第四号住居址実測図・接合関係図……23
第一五図　第四号住居址貯蔵穴・炉址実測図……24
第一六図　第四号住居址出土遺物実測図(1)……25
第一七図　第四号住居址出土遺物実測図(2)……26
第一八図　第五号住居址実測図……28
第一九図　第五号住居址出土遺物実測図……29
第二〇図　第三調査区遺構分布図・第一・二号土壙・周溝実測図……32
第二一図　第一・二号土壙出土遺物拓影図……33

# 図　版　目　次

図版第一　遺跡の遠景〈南より〉
遺跡の現状〈西より〉
図版第二　第一調査区トレンチ（左：１Ｔ，右：４Ｔ）の撹乱状態〈南より〉
第一号住居址遺物出土状態〈北より〉
図版第三　第一号住居址管玉出土状態
第二号住居址遺物出土状態〈北より〉
図版第四　第三号住居址遺物出土状態〈南東より〉
図版第五　第三号住居址遺物出土状態〈北より〉
第三号住居址土器出土状態
図版第六　第五号住居址遺物出土状態〈北より〉
第五号住居址土器出土状態〈西より〉
図版第七　第三調査区第一号土壙全景〈南より〉
第三調査区第二号土壙全景〈北東より〉

# 第一章　はじめに

常澄村は茨城県のほぼ中央に位置し，東経140°33′，北緯36°18′にあり，東西約８km，南北約５kmで面積は28.72㎢である．地形はほぼ平担で，那珂川と涸沼川に接した水田地帯と内陸部の台地とからなり，大串遺跡はその沖積地に突き出した台地に位置している．

周辺には国指定史跡大串貝塚をはじめ数々の古墳や遺跡が点在し，古くからこの地域に先人たちが住みついていたと思われる．今回，この大串遺跡をはじめとする大串貝塚周辺一帯を（仮称）「大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり事業」により，歴史公園として整備する運びとなった訳である．

計画にあたっては，数千年に亘る歴史を持ち，考古学上有数な史跡でありながら，比較的地味な存在でしかなかった大串貝塚を広くアピールすること，現在失われがちな住民のコミュニティの活性化，レクリエーションの場の提供，住民の健康増進等を図り，「歴史と文化の村，ふれあいの村」としての本村の発展を目標としている．

概要については，遺跡の保護保全はもとより広い意味での整備を図るために，出土品等の保管・展示，また当地に言い伝わる巨人伝説等歴史的背景の紹介，コミュニティ形成の場としての機能整備等を目的とする歴史資料館（まちづくりセンター）の建設，児童・青少年には健全な運動やサークル活動の場を，老人には憩いの場を与え，スポーツ・レクリェーション等の振興により人間性を培い，村民にうるおいと豊かさを与えることを目的とし，さらに災害時における地域住民の避難場所としての防災機能も備えることを図るものである．

以上のような事業計画から，整備を実施する上で，周知の遺跡であり貴重な埋蔵文化財が包蔵されていることも予想される同地域の確認調査を実施した次第である．調査は，昭和62年10月に確認した第一次調査区の西側および北側の約3000㎡を第一～第三調査区に指定，建設工事により特に掘削破壊される地点を重点に実施した．確認調査は，当初に試掘溝より住居址等を発見し，昭和63年11月25日から平成元年１月21日までの約２カ月に亘って行われた．今回の調査により，古墳時代前期の住居址５軒，古墳１基，縄文時代後期の土壙２基を発掘し，数多くの遺物が出土した．遺構は現状維持保存が困難なため，充分に協議検討を重ねた上で記録保存を図ったが，新たに発見することができた遺構および遺物等，本村の古代からの歴史を知る上で大変有意義であった．また従来より存否が不明であり，発見が期待されていた第三調査区の古墳の存在が明らかにできたことは本当に幸運であった．

（常澄村教育委員会）

# 第二章　遺跡の位置と環境

茨城県東茨城郡常澄村塩崎に所在する縄文時代前期の大串貝塚は，古く奈良時代の『常陸国風土記』に紹介され，戦前の昭和11年（1936）に大山史前学研究所，さらに昭和18年（1943）にも日本考古学研究所が発掘調査を実施してきた遺跡で，昭和45年度（1970）には国の史跡に指定されており，あまりにも研究者および地域の人々にとって著名な貝塚である．

今回，確認調査の対象となった場所は，大串貝塚の所在する台地上，常澄中学校の西南側にあたる畑地で，一般には貝塚と区別して大串遺跡と呼んでいる．

遺跡の占地する水戸東南台地は，那珂川右岸に形成され，涸沼川との合流地点に向って発達し，先端部付近は標高18～15mを測る三角形状を呈する．東南に展開する沖積地は，標高２m前後の非常に広大な水田が続き，やがて涸沼川を介して大洗の洪積台地に至る．

一方，那珂川の左岸には，三反田の台地が河口方面に発達し，両台地間は那珂川の形成した肥沃な水田地帯となっている．

貝塚が形成された縄文時代前期の海進時の頃は，台地の近くまで海水の影響を受けた汽水域がみられ，各所にラグーンを形成していたことは確実である．水域にはスズキ・ボラ・クロダイ・ドチザメなどの魚類が棲息し，砂泥底のラグーンはヤマトシジミやイソシジミなどが繁殖する好条件を備えていたと思われる．また，台地の森林はイノシシをはじめシカ・タヌキ・テンなどの中形哺乳動物にとり絶好の住処であったにちがいない．

やがて時代が推移して本遺跡で発見した住居址（古墳時代前期）を営む頃になると，海退現象は一層すすみ那珂川流域の水戸市圷大野・同中大野遺跡の出土品が示すように，沖積低地の中でも標高４m程度の微高地は陸地化して居住環境が台地から低地に拡大するようになり，これにともなって水田農耕の基盤も次第に確立されてくる訳である．

大串遺跡を取り巻く自然的環境の一端は，かならずしも各時代により同一とはいえないが，大略以上のように想察できよう．

他方，考古学的環境に目を転ずると，本台地の先端部には数地点に貝塚が存在する．この貝塚の内容は再三にわたる報告があり，あらためて説明する必要がないまでによく知られている．しかし，台地上の常澄中学校敷地（昭和33年造成）内については不明な部分が多い．貝塚から若干離れた一角には，今回調査した古墳時代前期の集落（規模不明）や縄文時代後期の土壙が存在するし，さらには周溝墓，数基の古墳も散在している．こうした台地先端部のありかたは，対岸の三反田台地でも，縄文時代の貝塚，弥生時代の土壙墓，古墳，住居址などが存在し，すこぶる相似た面が窺われるのである．

第一図　大串遺跡付近地形図

# 第三章　発掘調査の概要

今回の調査範囲は，昭和62年10月に実施した第一次調査区（円形周溝墓と溝状遺構発見）の西側と北側の畑地（面積約2,200㎡）で，『大串貝塚周辺におけるふれあいのまちづくり』事業地内のエントランス広場・スポーツ広場（プール）を第一調査区，それより西側のまちづくりセンター建設地を第二調査区，北側の台地縁の太古の広場とその周囲を第三調査区とした．この調査区の設定にあたっては，事業計画図を参考として，いずれも建設工事によって掘削破壊される場所を選んだ．

## 1　第一調査区

中学校グランドの農道を隔てた南側の畑地（プール建設場所）620㎡である．東から幅4.0m，長さ20mの確認トレンチを4本設定した．ここは写真図版が示すように全面的にトレンチャーの撹乱溝が縦横に入っており，住居址または土壙などは発見できず，僅かに第10トレンチ内で幅1m，深さ40～50cmの溝1本を確認した程度であった．

## 2　第二調査区

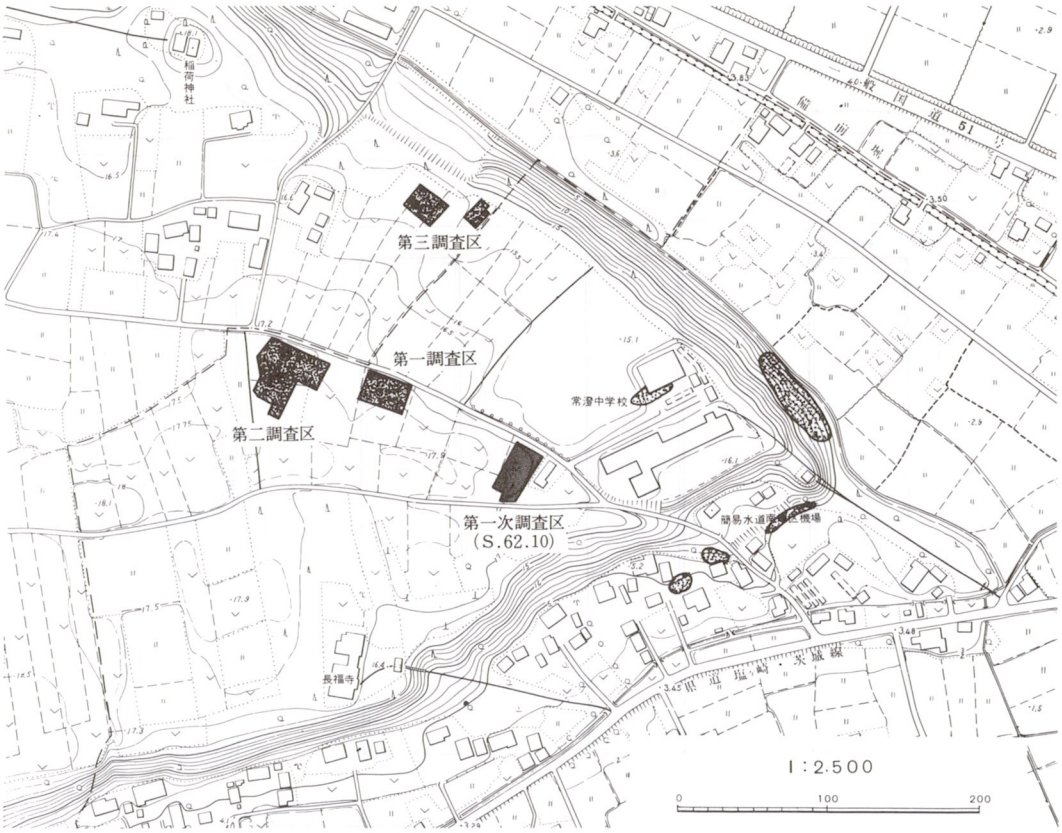
まちづくりセンター建設地の約1,000㎡である．確認トレンチは，第一調査区と同様に幅4mのものを4本，（6T＝20m，7T＝48m，8T＝40m，9T＝20m）設定した．遺構が検出された場合は，その部分を拡張する方法をとった．

遺構が発見できたのは，第7～9トレンチ内で住居址と溝である．第7トレンチでは，中央より南側の7・8区と11・12区に各1軒，第8トレンチでも同じように，6～8区と9・10区に各1軒，西端の第9トレンチにおいては，4・5区に1軒のあわせて方形または長方形を呈する古墳時代の住居址5軒，それに第7～9トレンチの3・4区にほぼ東西方向に走行する幅60cm，深さ15cm前後の細い溝（時期不明）1本が確認された．

住居址の調査にあたっては，従来から終始一貫し堅持してきた方法，つまりすべての遺物は，原位置のまま柱状に残し，出土地点，床上レベルや表裏関係などを記録し，その出土状態を観察してから収納する方法を採用した．個々の遺物は，調査の時点でそれが可能なかぎり，遺棄（使用場所で置き去りにする）と廃棄（使用場所や他の所に棄てる）の状態が分離できるような資料の獲得につとめ，研究の基礎的データーとしても活用できるように配慮することとした．

## 3　第三調査区

中学校グランドの北端に近い，約600㎡の範囲で，かつて墳丘らしきものが残存していたといわれる場所，いわゆる太古の広場である．まず古墳の所在を確認するために幅2.5mのトレンチ2本（10・11T）を設定し，さらにその北西側畑地（太古の広場）に幅4.0mのトレンチ3本（12～14T）を並列させた．各トレンチの長さは15～18mである．



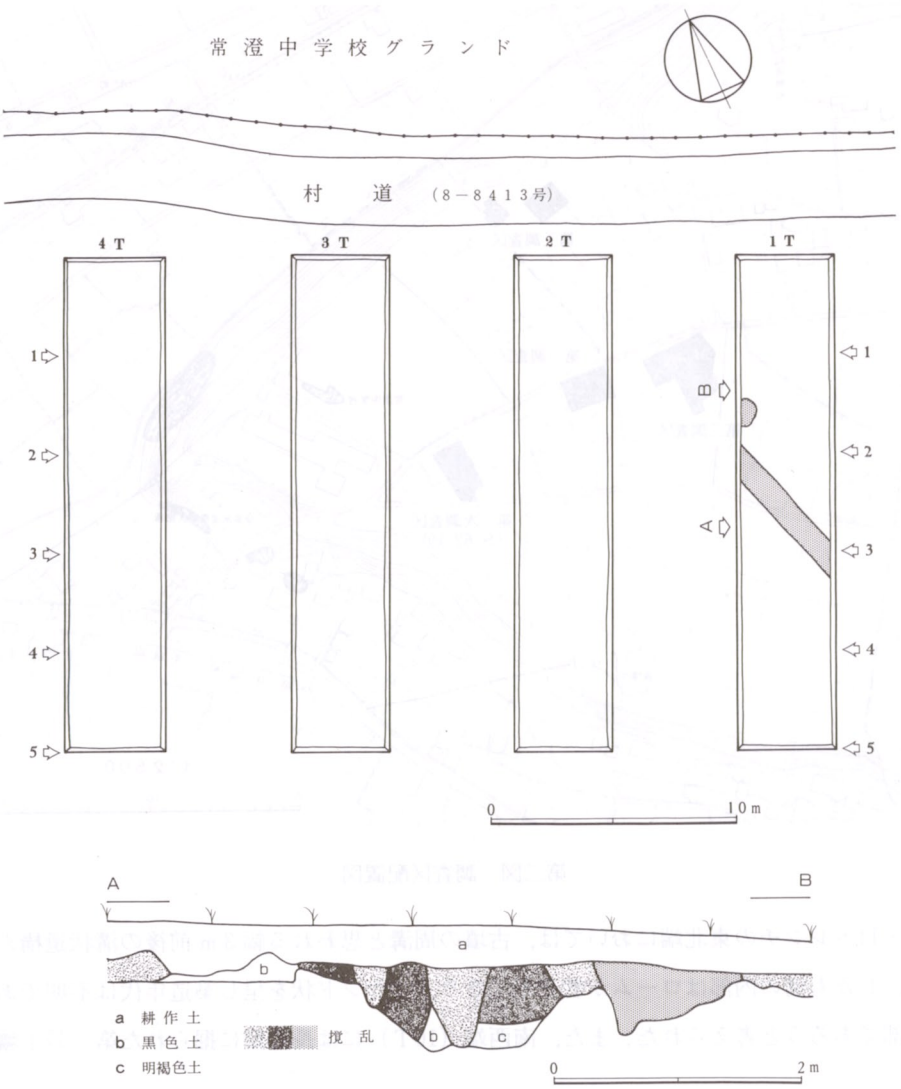

第二図　調査区配置図

第10・11トレンチの東北端においては，古墳の周溝と思われる幅３ｍ前後の溝状遺構が方形にめぐり，しかも溝の内部はロームが若干高くなり，マウンド状を呈し築造年代は不明であるが方墳の一部であろうと考えられた．また，南西端（10T）には長方形に掘られた第一号土壙が存在する．

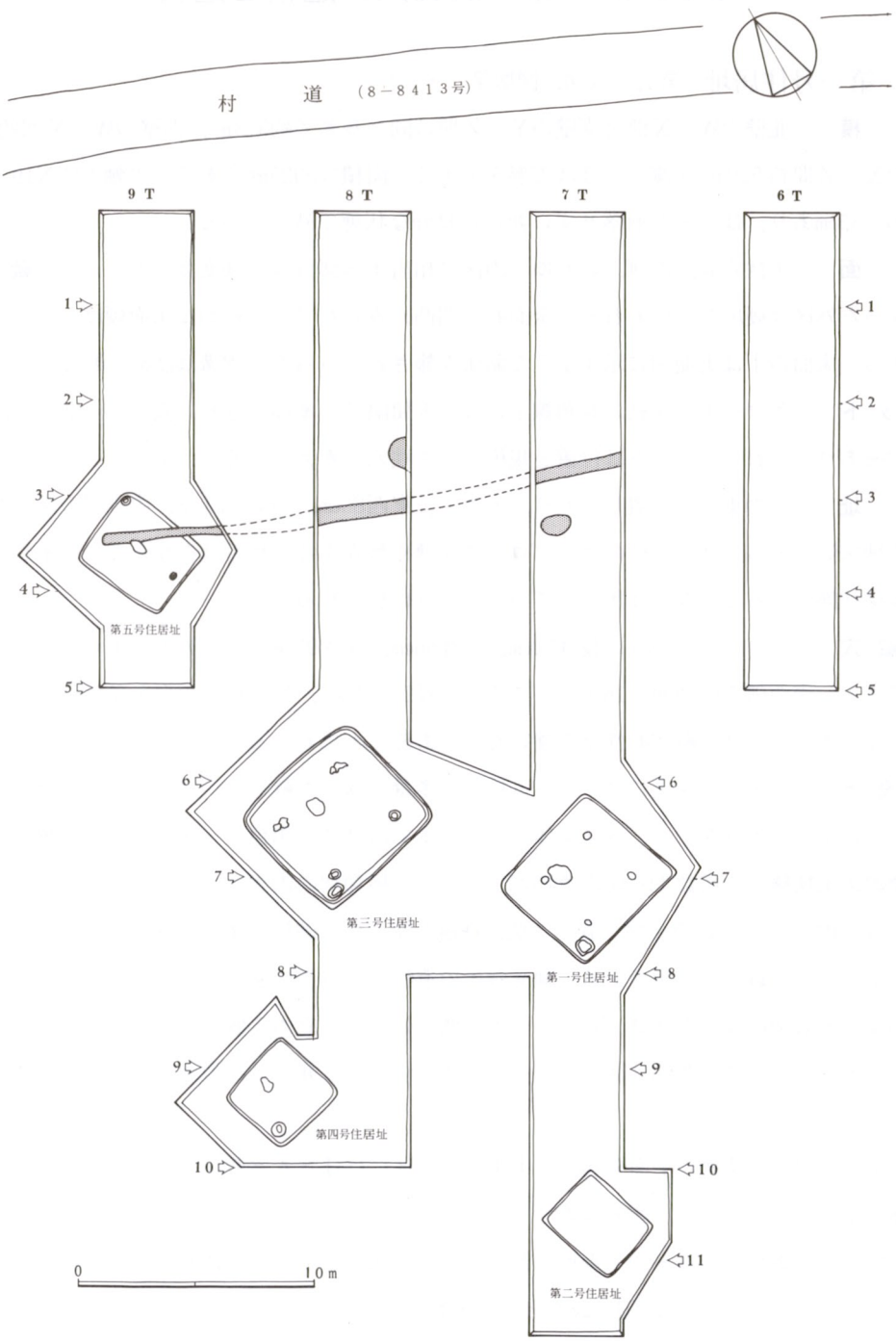
第12～14トレンチ一帯は，全面にトレンチャーの撹乱溝が走行し，ローム上面の撹乱も甚だしく遺構の検出が危ぶまれたけれども，幸い長方形の第二号土壙を発見調査することができた．この土壙群は形状と出土遺物を考えると，おそらく縄文時代の後期に構築されたものであろう．本遺跡の周辺には未確認のこうした種類の遺構がなお埋没している可能性も指摘できる．

以上のような調査を踏まえて確認・発掘した遺構は次の種類である．

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 住居址 | 古墳時代前期 | ５軒 | 土　壙 | 縄文時代後期 | ２基 |
| 古　墳 | 方墳（年代不明） | １基 | 溝状遺構 | 時期不明 | ２本 |




第三図　第一調査区遺構分布図




第四図　第二調査区遺構分布図

# 第四章　第二調査区の遺構と遺物

## 1　第一号住居址（第五～八図，図版第二・三）

**規　模**　北壁のW－X間と南壁のY－Z間は同じ長さで約5.3m，西壁のW－Y間約4.7m，東壁のX－Z間約5.0mを測り，ほぼ方形を呈する．面積は約25㎡である．主軸方位N19°W．壁高は30～35cmあり，ほとんど崩落せずに非常に良好な状態で残っている．

**床　面**　主柱穴間の内側，いわゆる内区に相当する部分は，硬度2であるが，貯蔵穴の周囲を除いた外区は硬度3と思われる．全面的に凹凸がみられて，一般的な床面硬度のありかたに相違する．床面の下は実測図に示すような貼床が施されているが，周溝は認められない．

**ピット**　各コーナーを結ぶ対角線上にほぼ等間隔で4本検出され，直径30～35cm，深さ約40～52cmあり，これらのピットは位置と規模から主柱穴と考えられる．

**炉　址**　$P_1$の東側に位置しており，大きさは東西80cm，南北110cm，中央部の深さ約16cmを測る地床炉である．径1cm位の焼土ブロックが薄く散在する．炉石は存在しない．本炉址は焼土の堆積状態をみると長期間使用されていないように思われる．

**貯蔵穴**　Yコーナー寄りに長径70cm，短径66cm，深さ92cmのほぼ方形に掘られた大形のピットである．南西隅の確認面下16cmのところから径20×16cm，厚さ15cmの白色砂質粘土塊が出土している．本ピットは貯蔵穴的性格の強いものであろうと思われる．

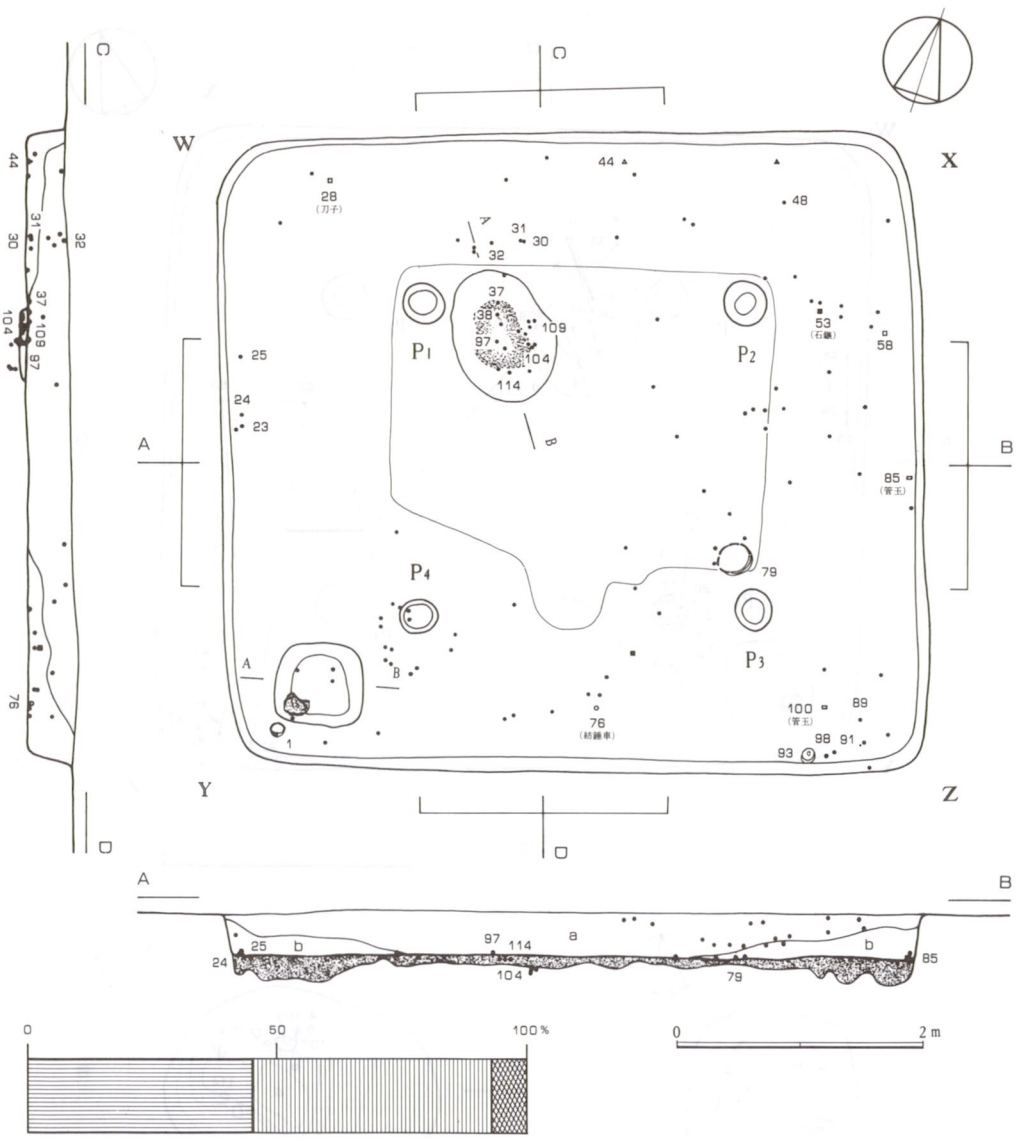
**埋没土**　外区の床面上には，ローム粒子を多量に含んだ軟らかい暗褐色土が堆積し，その上部に黒色土が厚く存在する．内区全体は確認面までほぼこの黒色土一層によって被覆される．

**遺物の出土状態**　総数116個の遺物が出土した．種類別の内訳は，土師器108個（炉址内12個，貯蔵穴内2個），紡錘車1個，管玉2個，鉄鏃2個，炉石破片1個，自然石1個，他に縄文時代の土器破片と石鏃が各1個である．縄文時代の遺物は埋没土に混入していたものであろう．

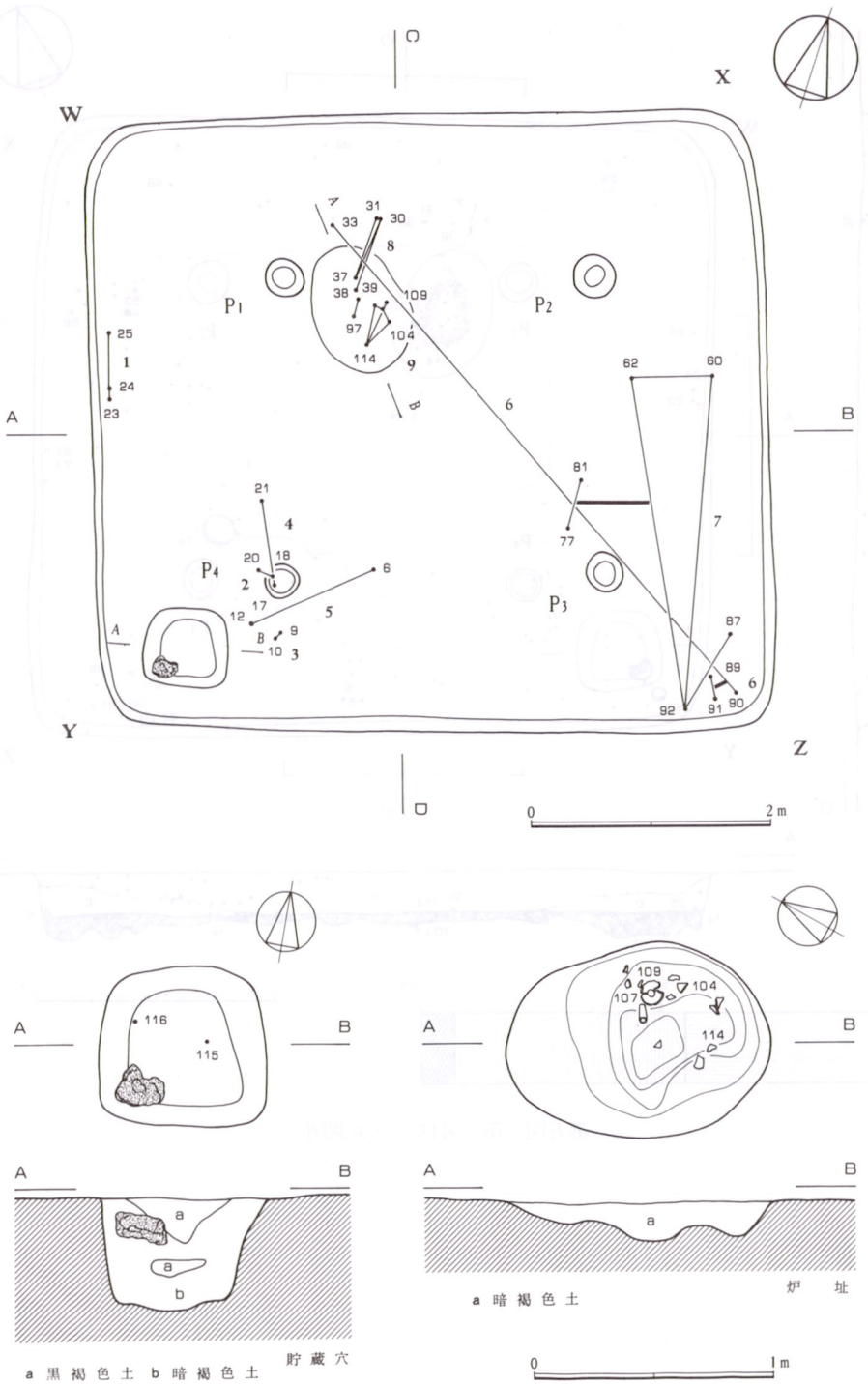
土師器の表裏関係は，表49個（45%）＋裏52個（48%）＋立ち7個（7%）＝108個（100%）という比率を示す．この関係は従来のデータに比較すると，非常に類似する数字となり特別に変った傾向は認められない．

ドットで記録した遺物の平面分布は，中央部の内区にはほとんど散在せずに，大部分の遺物はほぼ外区全体にみられるが，西側は著しく少なくなる．床面またはそれに近いレベルで出土した遺物の中には，甕形土器71・79，壺形土器93，有段口縁壺形土器48，鉢形土器1，高坏形土器39，他，紡錘車76，管玉85・100，刀子28などが含まれる．

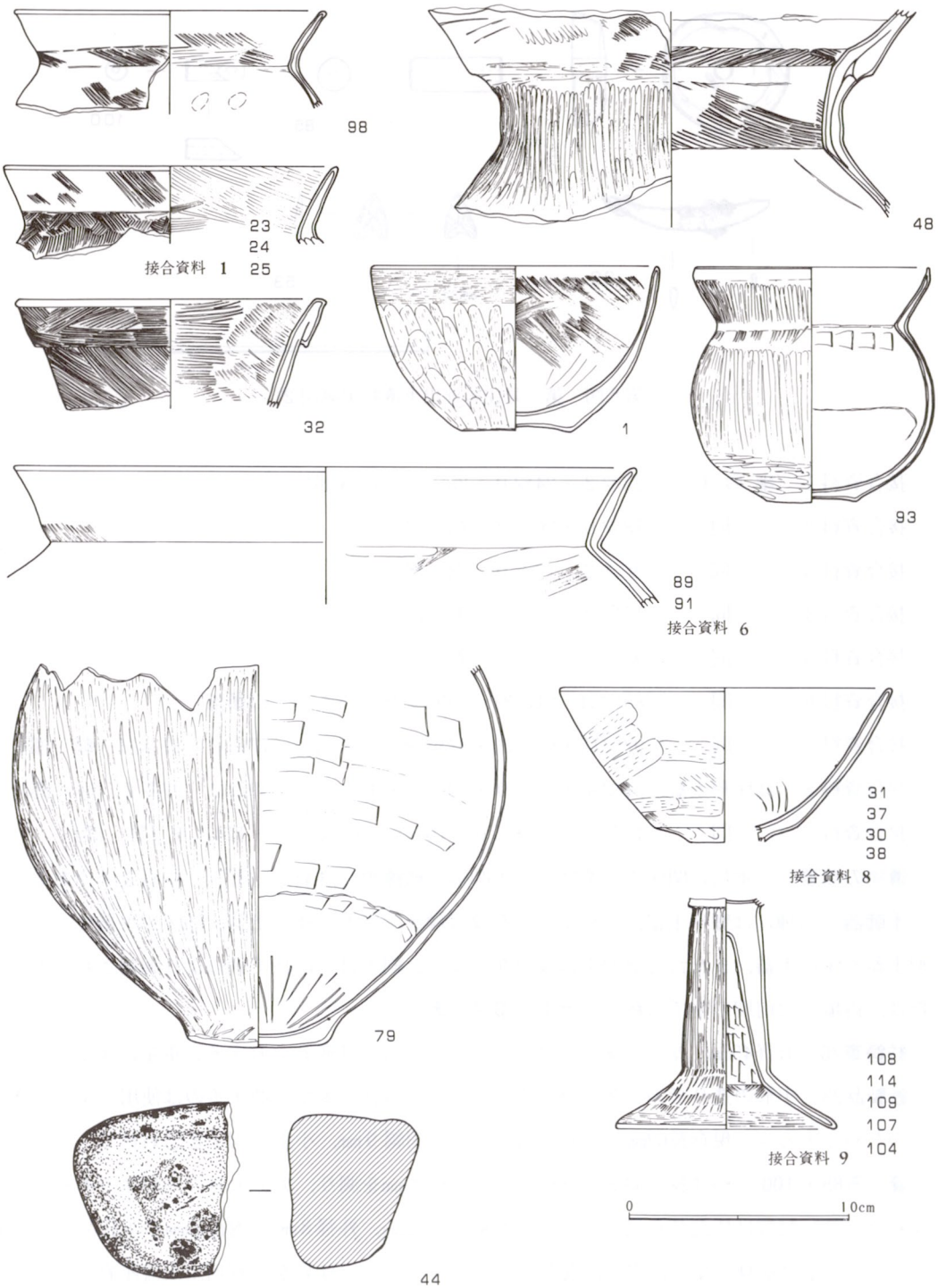
接合資料は，甕形土器に7例と高坏形土器に2例（同一個体の破片を含む）が抽出でき，資料5～7の甕形土器を除くと，すべてが床面から出土した資料である．



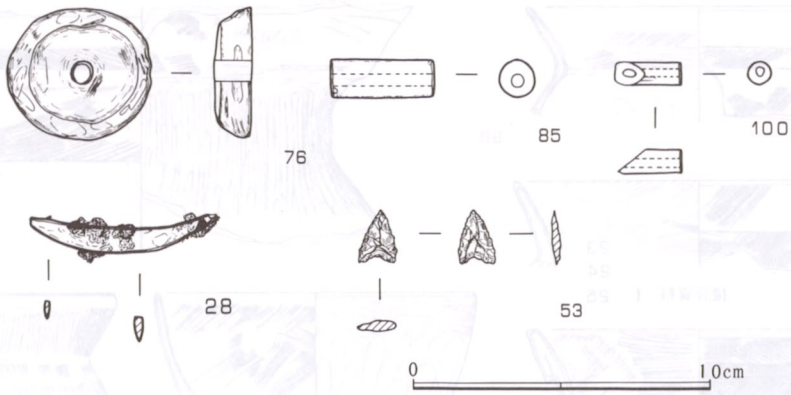

第五図　第一号住居址実測図




第六図　第一号住居址接合関係図・貯蔵穴・炉址実測図




第七図　第一号住居址出土遺物実測図(1)




第八図　第一号住居址出土遺物実測図(2)

接合資料１〈甕 形 土 器〉23▽２・24▽０・25▽０（口縁部）
接合資料２〈　　同　　〉18▽０・20▽２（胴　部）
接合資料３〈　　同　　〉９△２・10△０（胴　部）
接合資料４〈　　同　　〉17▽０・21▽０（胴　部）
接合資料５〈　　同　　〉６▽20・12▽０（胴　部）
接合資料６〈　　同　　〉89▽24・91△31……90▽28・33△23（口頸部）
接合資料７〈　　同　　〉92▽12・60▽22・87▽19・62▽12……77△０・81△11（胴　部）
接合資料８〈高坏形土器〉31▽４・37▷０・30▽５・38△０……39△０・97▷０（坏　部）
接合資料９〈　　同　　〉107△０・108△０・104△０・109△０・114△０（脚　部）

**遺物の概要**　　本址に関係する遺物は，土師器，紡錘車，鉄製品，管玉，炉石などである．

**土師器**　器種には甕形土器，壺形土器，有段口縁壺形土器，鉢形土器，高坏形土器などで，坩形土器や坏形土器，また台付甕形土器は存在しない．刷毛目と篦状工具により調整された本土器群は，古墳時代前期の中でも新しい要素が濃厚である．

**紡錘車76**　直径45mm，厚さ12mmを測り，中央に径７mmの貫通孔を有する．重量は30ｇである．

**鉄製品28**　小形の造りで刃と茎の境が不明である．形状が多少湾曲するのは使用による研ぎ減りのためであろう．現存長62mm，刃長45mm？，最大刃幅９mm，小形の刃子と思われる．

**管　玉85・100**　85は長さ33mm，外径13mm，内径４mmを測り，大形太身の完形品である．両側穿孔であり，材質は灰白色を呈する．100は現存長22mm，外径８mm，内径３mmの欠損品で，前者にくらべて小形細身となる．穿孔は両側から行われている．珪岩製．那珂川上流産岩石．

**炉　石44**　土師器と一緒に投棄された欠損品である．現存長7.5ｃｍ（推定全長22.5cm前後），幅7.2cmの砂岩質の細長い自然石である．

## 2　第二号住居址（第九・一〇図，図版第三）

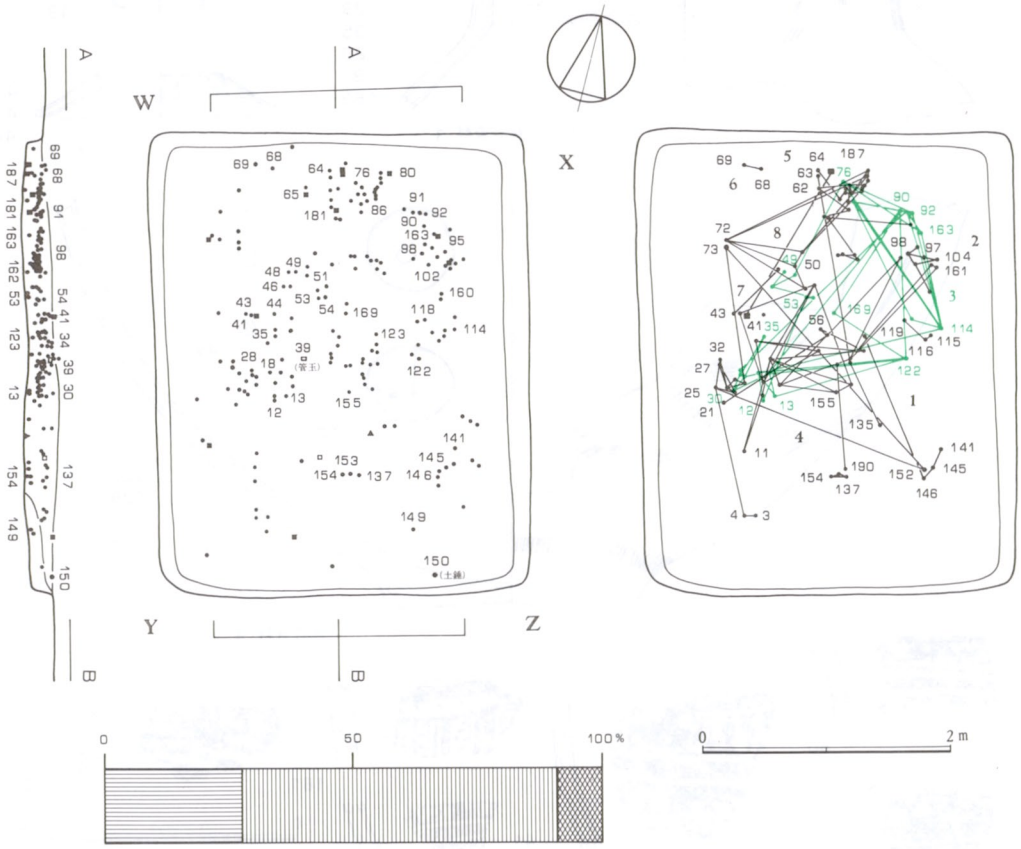
**規　　模**　北壁のW－X間は約2.9ｍ，南壁のY－Z間は約2.8ｍ，西壁のW－Y間は3.6ｍ，東壁のX－Z間も同様の長さで，プランはほぼ長方形である．面積は約10㎡，主軸（長軸）方位N 15° W. 西壁はほぼ垂直に近い傾斜で立ち上がっているが，東壁の下端がはっきりつかめなかった．深さは各壁とも10～19cmであるが，東壁は比較的浅く，壁面はあまり良好とはいえない．

**床　　面**　全体的に軟らかであり，硬度２に相当する．

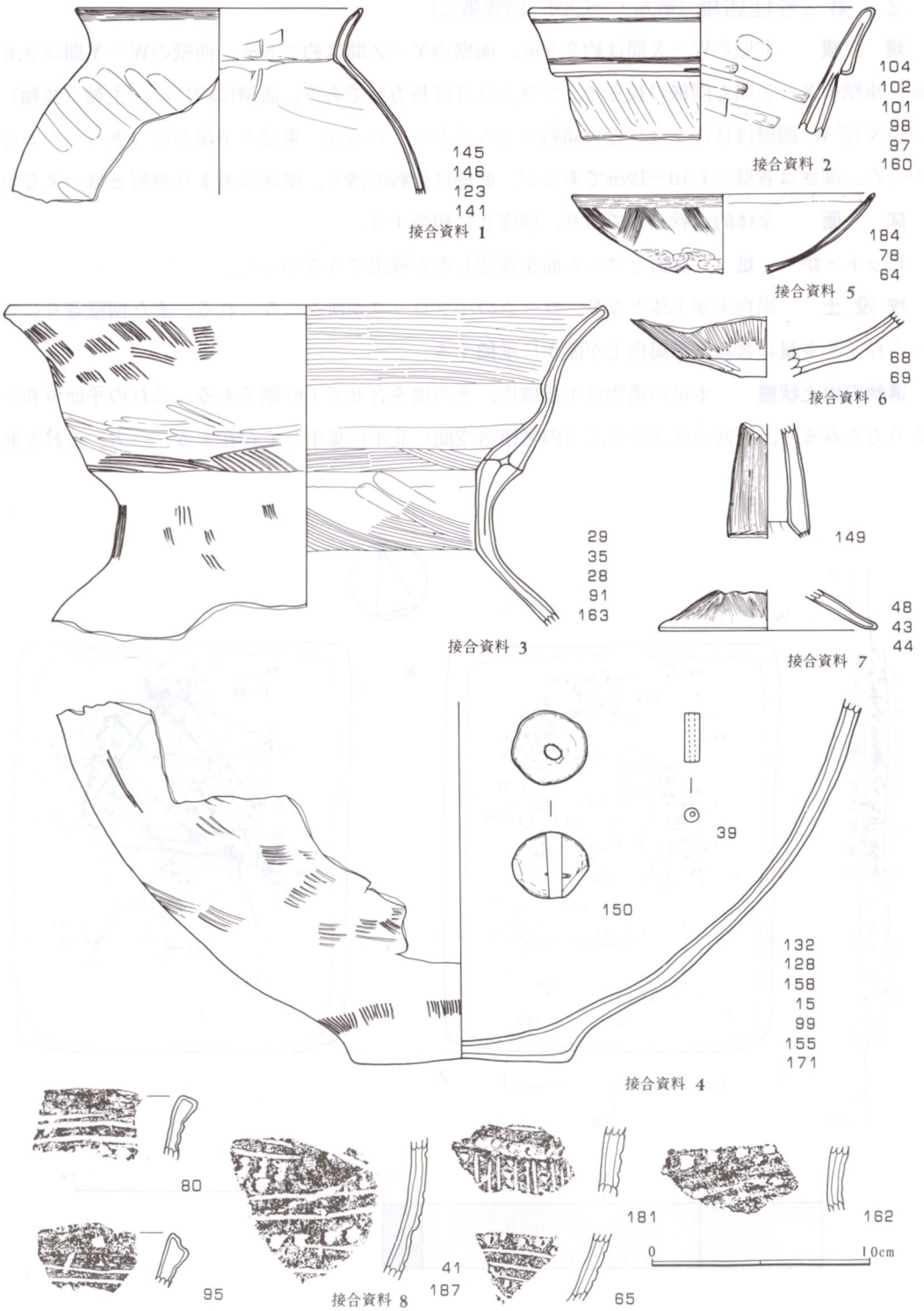
**ピット・炉　址**　床面とローム面を確認したが検出できなかった．

**埋 没 土**　黒色土が主体となり，ロームの小ブロックが所々にみられる．また南壁寄りにローム粒子を多量に含んだ黒褐色土が僅かに堆積する．

**遺物の出土状態**　本址の遺物は土器破片，その他を合せて190個である．これの平面分布のあり方をみると，竪穴のほぼ中央部（内区相当空間）北半に集中して存在する．一方，これを断




第九図　第二号住居址実測図・接合関係図




第一〇図　第二号住居址出土遺物実測図

面図に投影すると，床面出土の遺物はほとんど皆無に近く，大部分は床面上10㎝前後のレベルで出土していることがわかる．この状態は住居廃絶時に残された遺物ではなく，住居廃絶後，土砂を若干埋め戻した凹地に廃棄されたものである．そして，同一個体を含む多数の接合資料は，南北＞東西を指向し，遺物全体が北壁方向から投棄された典型的な廃棄のパターンと理解できよう．

土器破片の表裏関係は，表53個（28%）＋裏117個（63%）＋立ち16個（9%）＝186個（100%）となる．

接合資料は，同一個体の破片を器種別に整理すると，甕形土器1例，壺形土器3例，高坏形土器3例，縄文土器1例の合計8例となる．

接合資料1〈甕形土器〉145△16・146▽15・123△3・141△12……153▷3・154▷2・137▽16（口縁～胴部）

接合資料2〈壺形土器〉104△10・101▽11・98▽11・102▽10・97▽11・102▽10・160▽1（口縁部）

接合資料3〈　同　〉29▽8・35△10・28△12・91▽14・163▽5・76▽13・51▽11・49△10・46▽7・54▽12・53▽8・12▽6・30▽20・172▽13・114▽13・92▽14・86▽12・118▽10・17▽9・13▽4・18△16・122△11・90▽14・169△9（口縁～胴部）

接合資料4〈　同　〉56△7・125△9・34△17・170△8・21▽10（胴　部）
87△10・185▽12・83▽12・62▽13・93▽14・180△10・88△10……174△9・32▽10・27▽10・176▽9・173▽9・73▽13・152▽14・25▽10・175▽9・4△12・3△13（胴　部）
135△13・129▽17・63▽14（胴　部）
157▽9・190▽16（胴　部）
164▽10・166△9・165▷11・111▽10・179▽10（胴　部）
84▷12・78▽10・185▽12・77▽12・183▽12・82▷13・59▽9・50▽11・52▽12・72▽13・81▷12・79▽12・78▽10（胴　部）
57▽18・34△17・16▽12・42▽17・55△10・11▽13・14▽15・171▽10・132▽6・158▽2・128▽7・161▷1・103△10・99△10・15▽9・155△11（胴部～底部）

接合資料5〈高坏形土器〉78▽10・184▽12・64△5（坏　部）

接合資料6〈　同　〉68△15・69△13（坏　部）

接合資料7〈　同　〉48▽15・43▽16・44▷14（裾　部）

接合資料8〈縄文土器〉41▽20・187▽0（胴　部）

**遺物の概要**　本址出土の遺物は，土師器，土錘，鉄製品残片，管玉，自然石と縄文土器であり，後者は混入遺物と考えられる．

**土師器**　甕形土器，複合口縁壺形土器，有段口縁壺形土器，高坏形土器などの器種が存在し，器面の整形は刷毛目の上に篦磨きを施したものが多く，第一号住居址の器種構成とほぼ類似する．

**土　錘150**　球形の土製品である．直径30～33mm，重量35g，中央に径６mmの貫通孔を有する．

**鉄製品７**　現存長62mm，厚さ３mm，鉄釘の残片と思われる．

**管　玉39**　長さ22mm，外径７mm，重量２g，内径２mmで両側から穿孔されている．完形品であるが，第一号住居址出土品より小形細身となる．黒色泥岩製．八溝山地産の岩石を利用している．

**縄文土器**　沈線と刺突文を横位または縦位に組み合わせた文様帯を有する一群である．この文様帯を構成する型式は早期の田戸下層式に認められる．

## ３　第三号住居址（第一一～一三図，図版第四・五）

**規　模**　北壁のW－X間は約6.1ｍ，南壁のY－Z間は僅かに短かく6.0ｍ，西壁のW－Y間と東壁のX－Z間は約5.5ｍを測り，長方形に近い竪穴となる．面積は約34㎡で主軸方位はN14°Wである．壁高は50～55cmあり，壁面は崩落せずに良好な状態で残存している．

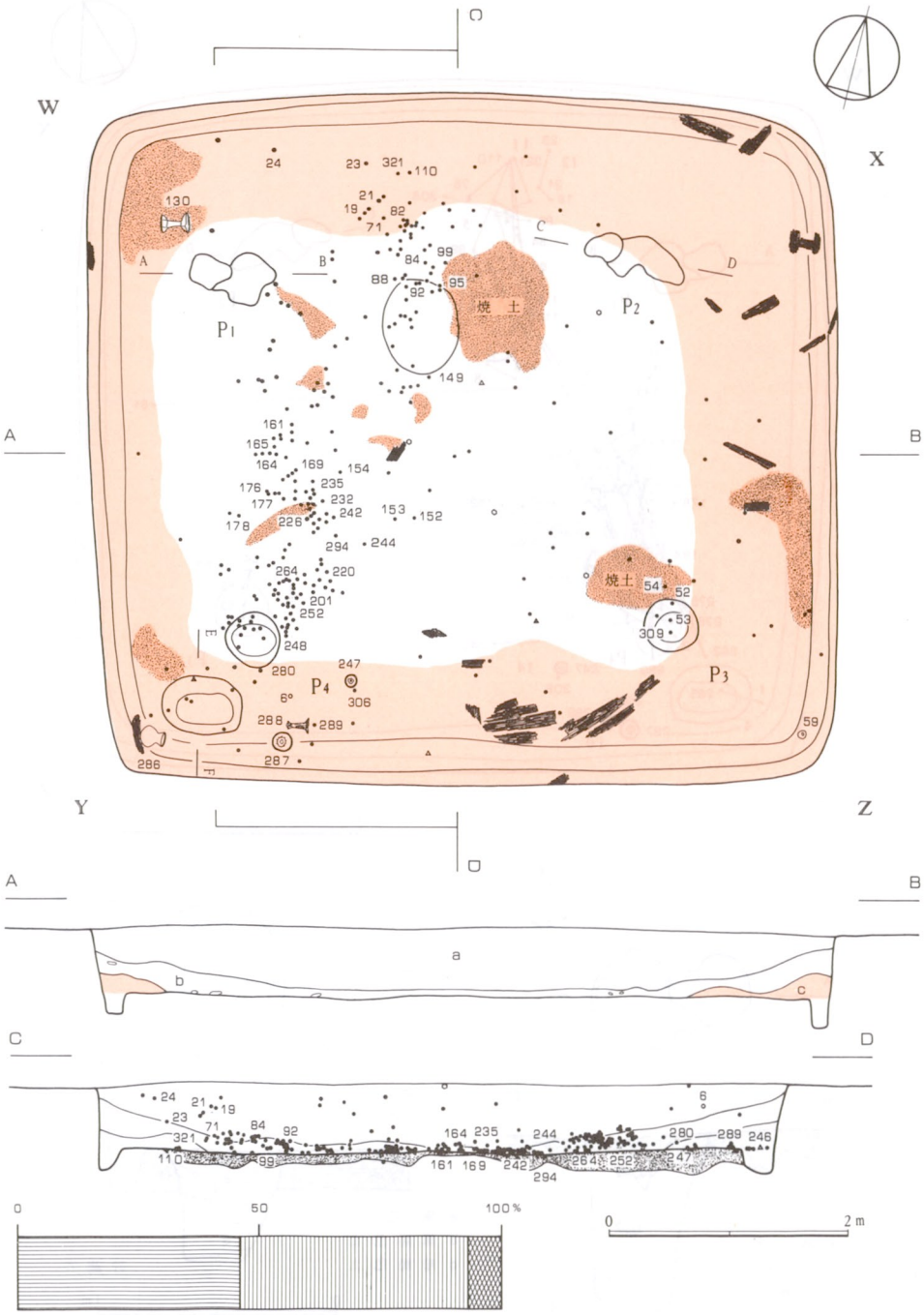
**床　面**　各柱穴間の内側（内区）は凹凸のある硬度３，外区はそれより軟らかく硬度２の状態である．部分的に相違するが厚さ５～15cmの貼床が全面に施されている．壁の直下には幅15～20cm，深さ15～23cmの周溝も存在する．また，床面には煉瓦状に焼けて赤変した部分が11か所に認められた．

**ピット**　各コーナーの対角線上に４本検出された．$P_1$と$P_2$はプラン不明瞭で各２本の重複ピットと想定されたが，半截発掘を行った結果，各１本のピットであることが判明した．これは貼床と同様のローム塊が柱穴開口部を被覆していたためであった（第一二図）廃絶住居址を再利用している可能性も考えられ注意しなければならない．各ピットは口径40～45cm，深さ70～76cmの立派なもので主柱穴とみなされる．

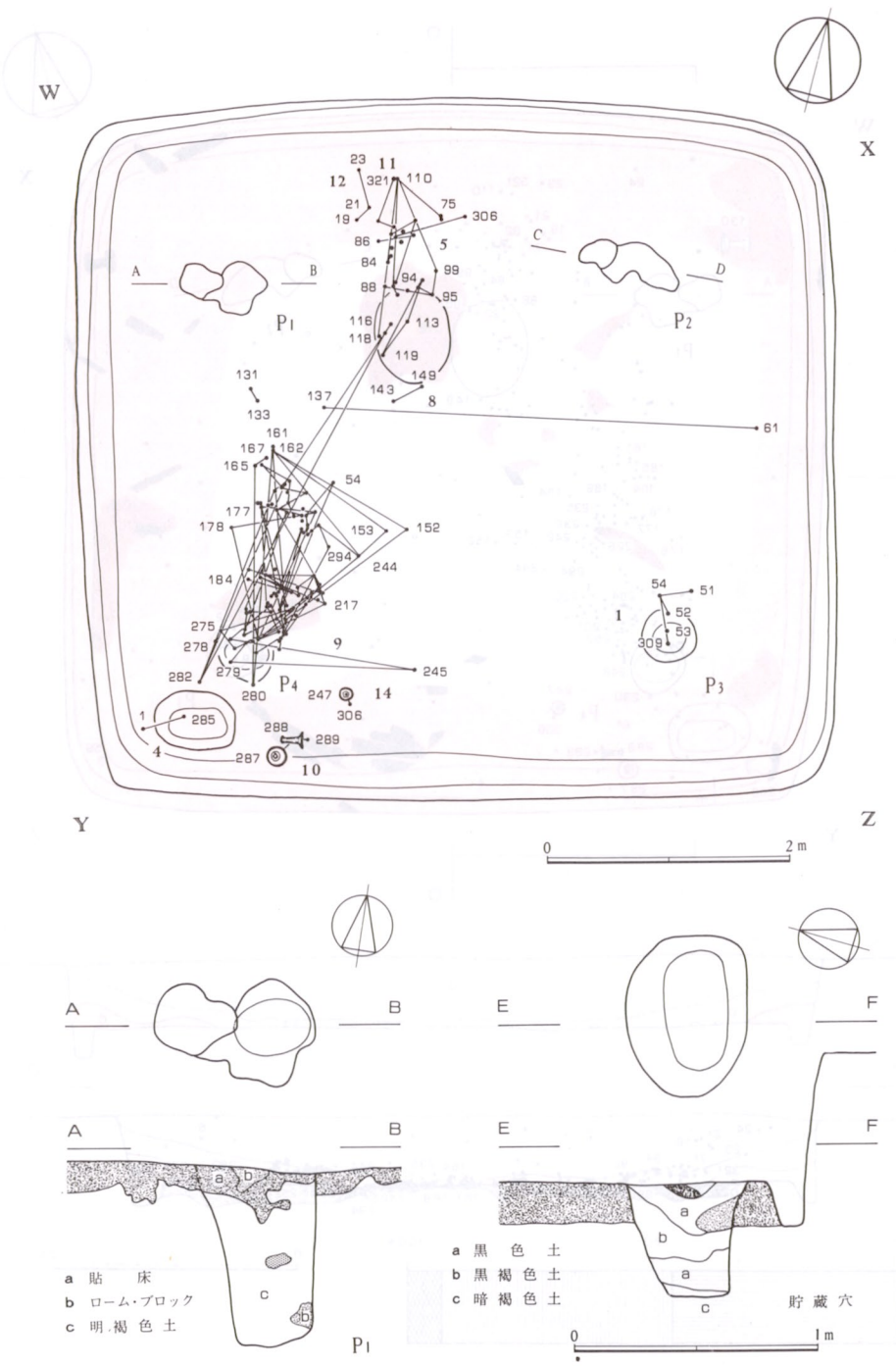
**貯蔵穴**　Yコーナーの近くにあり，長径65cm，短径50cm，深さ45cmの長方形に近い掘り込みである．底面は平坦であり，貯蔵用に掘られた大形ピットと思われる．

**炉　址**　床面の中央より僅かに北に寄った位置にある．範囲は不明瞭であるが南北75×東西60cm程度の大きさと思われる．中央部の深さは約10cmである．底部に煉瓦状の焼土層は存在しない．

**埋没土**　３層に区分される．周壁寄りの外区に相当する床面に，焼土・灰・木炭を含む赤褐色土ｃ，その上部つまり床面の内区に暗褐色土ｂが薄く，さらに黒色土ａが確認面まで堆積する．この土砂は各層とも埋め戻したもので自然に流入堆積したものではない．特に問題となるの




第一一図　第三号住居址実測図




第一二図　第三号住居址接合関係図・柱穴・貯蔵穴実測図

54
53
52
309

接合資料 1

178
232
177
261
253
194
176
252
261

接合資料 6

149

161
280
165
167

接合資料 2

19
21
23

接合資料 12

208
184
206
188

接合資料 9

88
94
95
92
99
110
84

接合資料 5

6

59

286

71
82
321

接合資料 11

306
247

接合資料 14

66

246

287
288
289

接合資料 10

130

26

0 15cm

第一三図　第三号住居址出土遺物実測図

はｃ層である．この層は実測図から窺われるように，壁に接し外区全周に厚さ10～20cmに堆積し，一般には焼土・灰・木炭細片を含んでいる．部分的に焼土だけがブロック状を呈していたり，細かい炭化材を混在する所もある．竪穴内でのこうした焼土・灰・炭化物層の堆積のありかたは，住居廃絶後の凹地でなにかをまとめて燃焼あるいは焼却した行為を示すものであって，火災による焼失住居を意味するとはかぎらない．

**遺物の出土状態**　ドットで記録した総数は321個である．これを平面分布上から観察すると，①Ｙコーナーの$P_4$と炉址を結ぶ南北方向にかけて，②炉址を含む北側にまとまって集積し，他の空間は非常にまばらとなっている．遺物の廃棄は，Ｃ－Ｄセクションと図版第四の写真を参照すれば，あらためて接合関係資料を引合いに出すまでもなく，①の鉢形土器（接合資料９）を主体とした破片類はＹコーナーから，②の壺形土器（接合資料５），高坏形土器（接合資料11・12）を中心とした破片類は多分北壁から，廃絶住居に棄てた状態を把握することができよう．

土器破片の表裏関係は，表146個（46％）＋裏147個（47％）＋立ち23個（７％）＝316個（100％）である．

**遺物の概要**　本址から出土した遺物の種類は，土師器，紡錘車，軽石，自然石などである．

**土師器**　器種には甕形土器，壺形土器，有段口縁壺形土器，鉢形土器，坩形土器，坏形土器，器台形土器，高坏形土器などが含まれる．

**甕形土器**　外反する口縁からくの字に屈曲する頸部に至り，胴部は球形を呈し，平底の底部が突出する器形である．頸部内面に稜をもつ．器面は刷毛目調整後に篦磨きを施したものが多い．

**壺形土器**　口縁が直線的に開き，頸部が収縮して球形の大きい胴部に続き，底部が僅かに突出する．器面の調整は甕形土器と同様である．接合資料６が該当する．

**有段口縁壺形土器**　大きな球形の胴部から頸部が短かく立ち上がって口縁に移行する．口縁部には２本一組の棒状浮文が縦位に貼付される．器面は全体に磨滅している．

**鉢形土器**　底部を欠損した大形品（口径43cm）である．底部から大きく内湾しながら立ち上がり，頸部を屈曲させて口縁が外方に開く器形を呈する．器面は，口縁部を無文とし，胴部を二種類の刷毛目によって調整している．

**坩形土器**　口縁が外反する大形の286・小形の59と口縁が内湾気味に大きく開く149の二種類が存在する．いずれも刷毛目調整後に篦磨きを施している．

**器台形土器**　器受部が小さく内湾して開き，脚部が外反しながら大きくひろがる．円孔は器受部中央のみに穿たれ，脚部には存在しない．刷毛目調整後に篦磨きを施す．

**高坏形土器**　坏部は底部から内湾して大きく開き，脚部は柱状にのびて裾部に至る．130の脚部は中膨みに近い．また，66のように円板状の底部内側から口縁が立ち上がる種類も存在する．器形的に新しい要素が窺える高坏形土器である．

**紡錘車6**　欠損品である．直径48mm，厚さ15mm，推定重量70ｇ．中央部に径約７mmの貫通孔を有する．材質は土製である．

**軽石26・246**　大小２個の軽石が存在する．破砕した石面が安山岩に類似しているために，ほとんどの面に磨耗した痕（△印）が残っている．おそらく磨石のような用途に供されたものと思われる．

## 4　第四号住居址（第一四～一七図）

**規　模**　北壁のW－X間と南壁のY－Z間はいずれも約3.3ｍ，西壁のW－Y間は約3.1ｍ，東壁のX－Z間は約3.2ｍを測り，ほとんど方形に近い竪穴で，面積は11㎡である．主軸方位N19°W．壁はほぼ垂直に掘られ深さ42～51cmを有する．壁面の崩落は認められない．

**床　面**　Yコーナー寄りの貯蔵穴付近は，厚さ８cm前後の貼床が施されている．中央部は凹凸があり硬度３に相当する．北壁寄りの外区とYコーナーの大形ピット付近が硬度２に比定される．周溝は認められない．

**ピット**　床面と壁外のローム面を精査したけれども検出できなかった．

**炉　址**　床面中央から僅かに北に偏在する．大きさは67×37cmの不整形を呈する地床炉で，床面を７cm掘りくぼめている．底面の焼土はレンガ状に良く焼けて固く，４cm前後の厚さを有する．炉石は存在しない．

**貯蔵穴**　Yコーナー寄りに存在し，開口部径約62cm，深さ36cmを測る大形のピットである．おそらく食料の貯蔵用として掘られたものであろう．

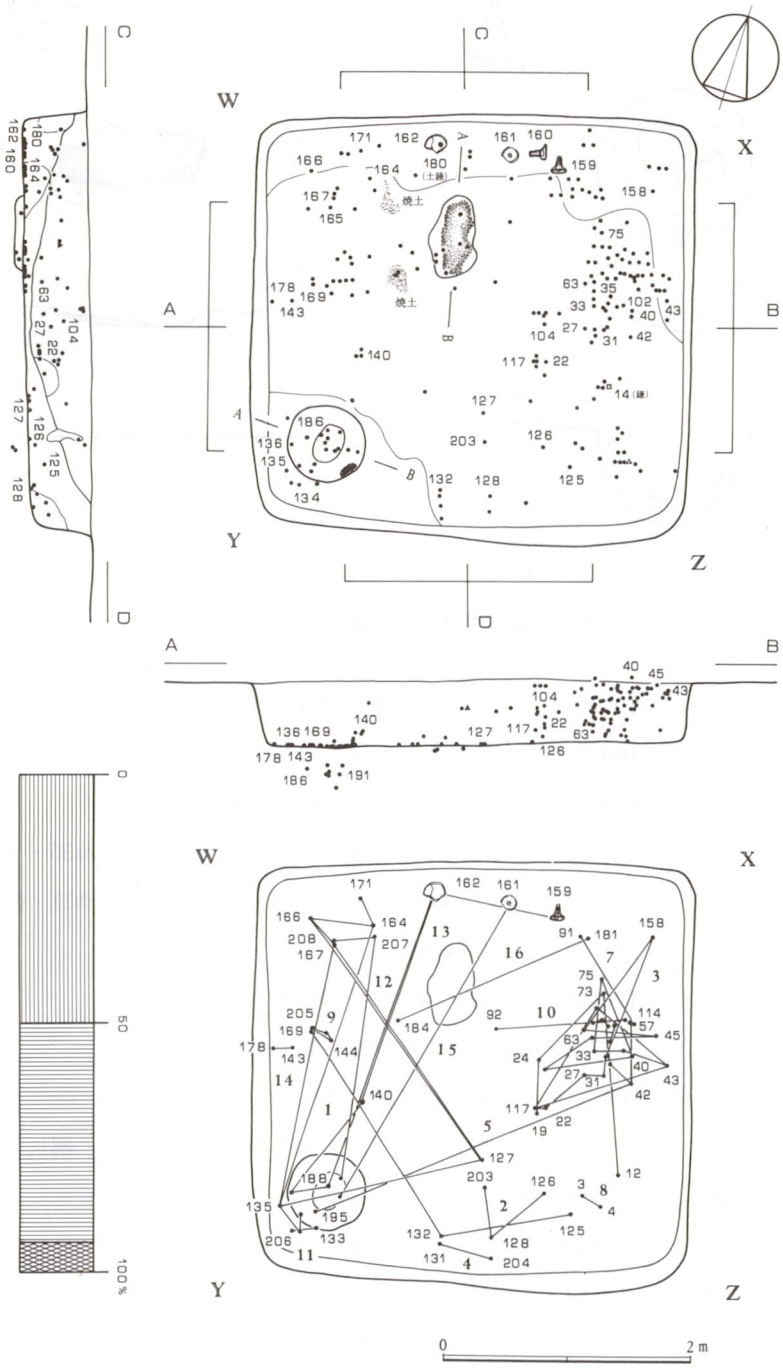
**埋没土**　２層に識別され，床面上にはローム粒子とロームの小ブロックを含んだやわらかい暗褐色土があり，その上に黒色土が堆積している．

**遺物の出土状態**　総数208個の遺物が出土している．平面分布上から観察すると，中央部が非常にすくなく，周縁部に多く存在し，特に東壁に近い空間が濃密である．こうした遺物の出土レベルは，竪穴東半のものが床面から確認面まで間断なく集積し，西半のドットは大部分レベルが床面に近づく傾向がみられる．A－B・C－Dセクションのドット群のありかた，接合資料の連結方向などを総合した場合，Xコーナーを中心に東と北壁側から，土砂の埋め戻しに伴い投棄された一括遺物と考えられる．

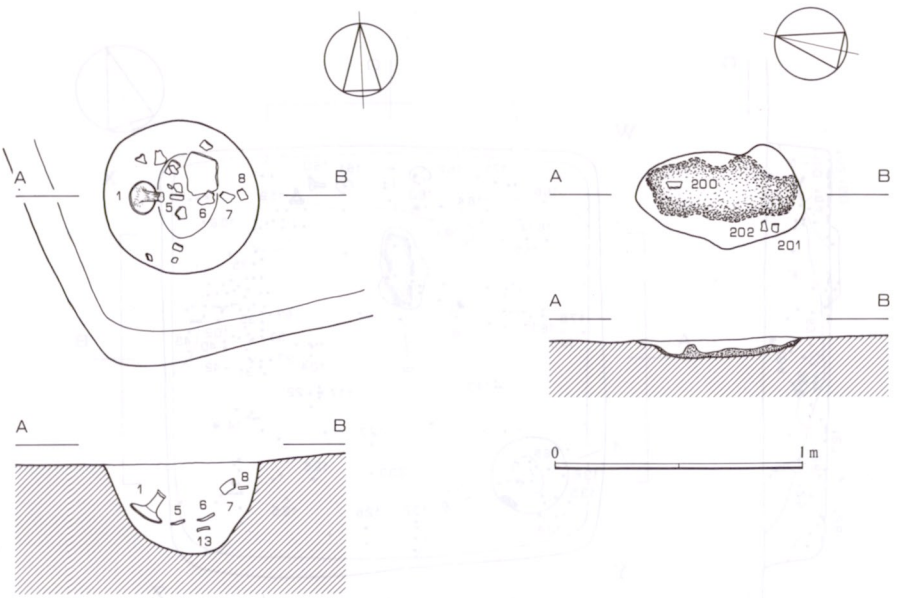
土器破片の表裏関係は，表102個（50%）＋裏89個（44%）＋立ち13個（６%）＝204個（100%）である．

接合資料は，甕形土器10例，鉢形土器１例，坩形土器１例，高坏形土器４例の合計16例が抽出できた．

接合資料１〈甕形土器〉164▽0・166▽0・167△0・127△0・135△0・134▽0・




第一四図　第四号住居址実測図・接合関係図




第一五図　第四号住居址貯蔵穴・炉址実測図

197△（－7）・171 △0（口縁～胴部）

169 △0 ・ 132 ▽3 ・ 125 △12（底　部）

接合資料2〈　同　〉126 △5 ・ 128 ▽0 ・ 203 △0（口縁～底部）

接合資料3〈　同　〉31▷25・32△25・ 158 ▽0 ・63▽14・45▽46・35△35・ 104 △30・40▷52・75▽33・33▽29・ 102 △30・43△40・ 117 △11・65△20・22△22・27△20（口縁部）

12△43・73△17・24▽46・19▽25（胴　部）

62▽24・61▽24・ 107 ▽25（胴　部）

接合資料4〈　同　〉204 ▽0 ・ 131 ▽5（胴　部）

接合資料5〈　同　〉57△41・ 110 ▽15・42▷34・ 195 ▽（－17）（胴　部）

接合資料6〈　同　〉60▽24・38▽34（口縁～胴部）

接合資料7〈　同　〉91△20・ 105 ▽27（胴　部）

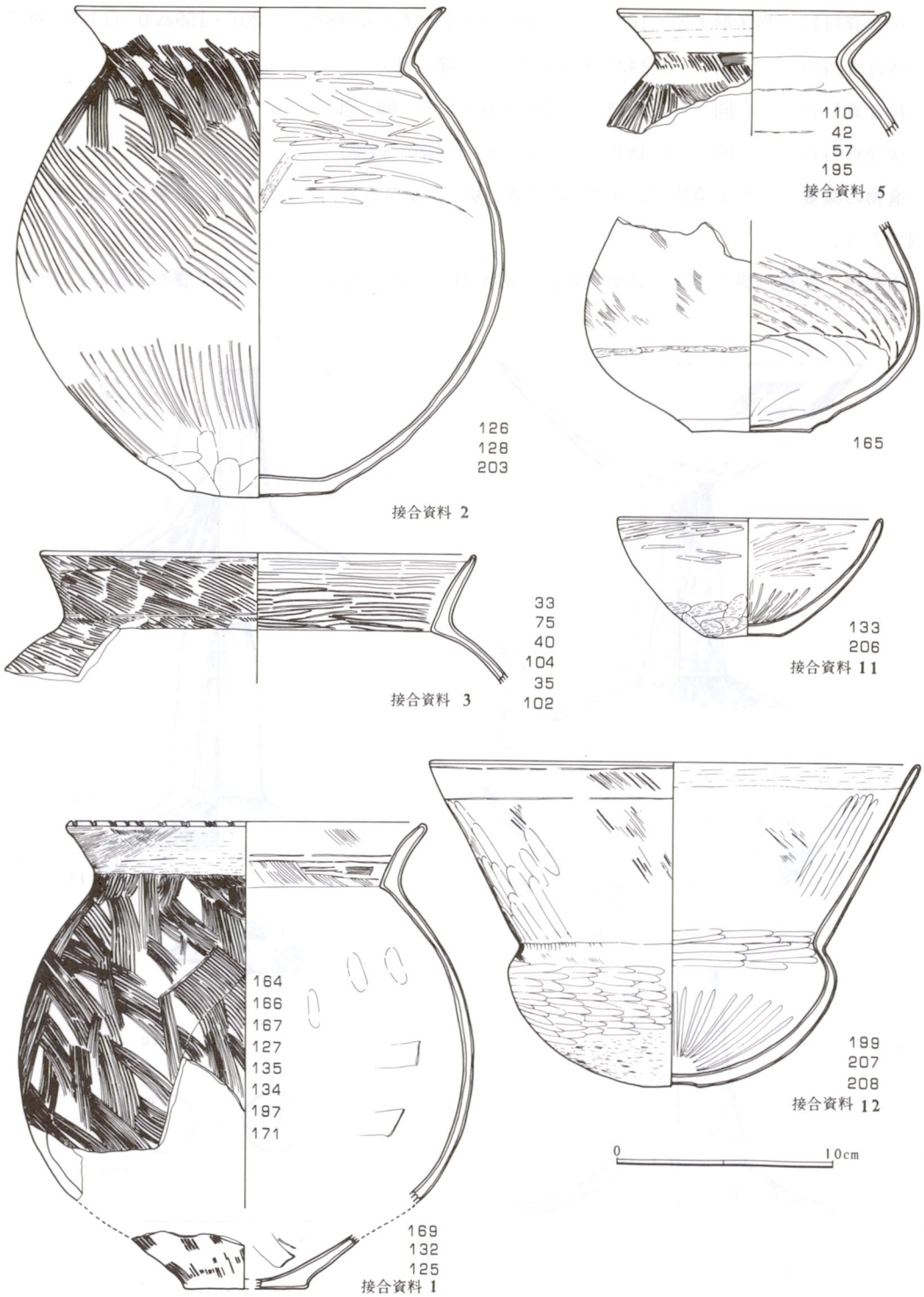
接合資料8〈　同　〉3 △44・ 4 ▽45（胴　部）

接合資料9〈　同　〉168 △0 ・ 205 △0 ・ 144 △0（底　部）

接合資料10〈　同　〉114 ▽5 ・92△26（底　部）

接合資料11〈鉢形土器〉133 ▽0 ・ 206 △0（口縁～底部）

接合資料12〈坏形土器〉207 ▽0 ・ 199 ▽（－15）・208 △0（口縁～底部）




第一六図　第四号住居址出土遺物実測図(1)

接合資料13〈高坏形土器〉162▽0・140▽10・136▽0・188△（−20）・159△0（口縁〜裾部）

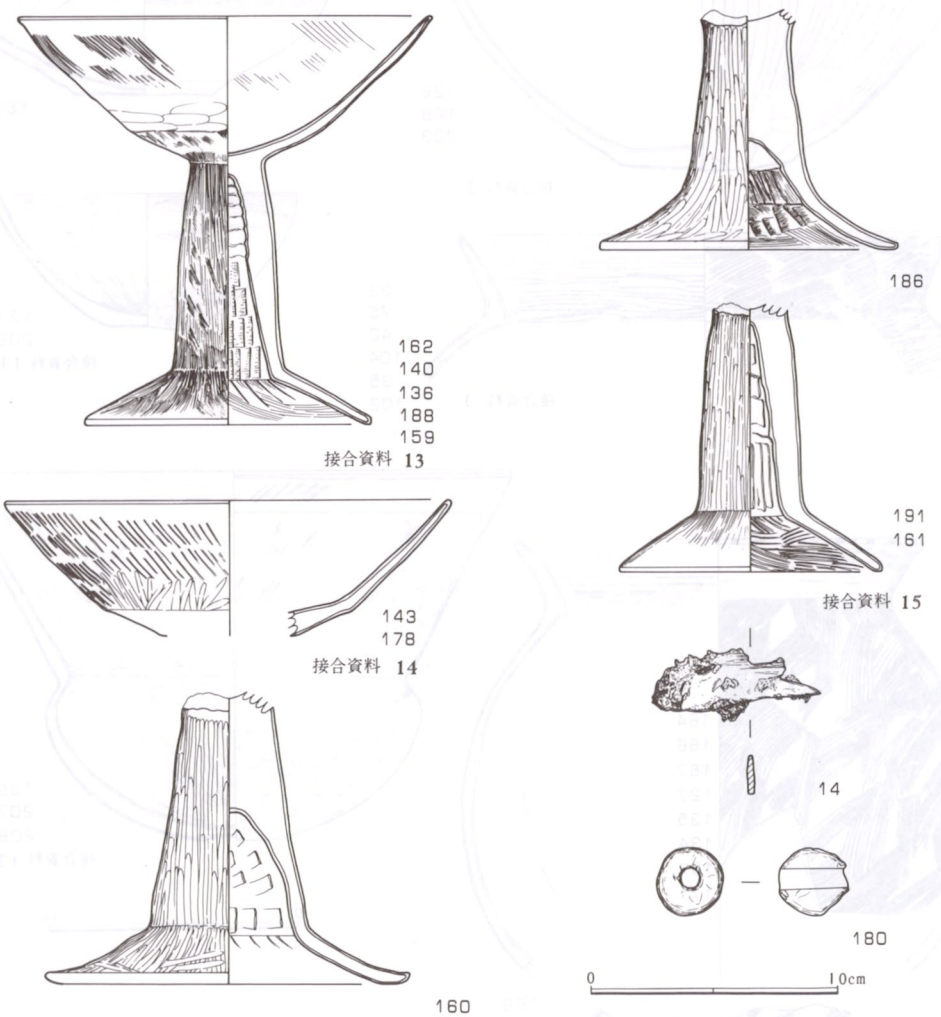
接合資料14〈　同　〉143▽0・178▷0（坏　部）

接合資料15〈　同　〉191▽（−23）・161△0（脚　部）

接合資料16〈　同　〉184▽0・181△0（坏部〜脚部）

**遺物の概要**　出土遺物は，土師器204個（復元土器を含む），土錘1個，鉄製品1個，軽石2個である．

**土師器**　器種は甕形土器，鉢形土器，坩形土器，高坏形土器などである．甕形土器は，球形に




第一七図　第四号住居址出土遺物実測図(2)

近い胴部から口縁部がくの字に外反し，頸部内面に稜を有する．器面は刷毛目と篦磨きが併用される．鉢形土器は，底部から口縁まで内湾して立ち上がる器形で，平滑に篦磨き調整を施している．坏形土器は，口縁径が胴部径，器高より大きい．器面の篦磨きは丁寧である．高坏形土器は，坏底部に弱い稜をつくり，脚部が柱状となり，裾部が外反または内湾気味に開く．この器形は中期の和泉式に至る直前の形態を示すものと考えられる．

**土　錘180**　球形の土製品で直径27mm，重量19g，中央に径8mmの貫通孔を有する．

**鉄製品14**　現存長67mm，最大幅21mm，厚さ3mmの板状を呈し，おそらく鎌の欠損品であろう．

**軽　石8・93**　第三号住居址から出土したような軽石である．破砕面が安山岩に類似しており，丸味をもった各面に摩耗した痕が認められる．おそらく磨石と同じような用途に使用されたものであろうが，その石質から考えて木製品が対象になったと思う．

## 5　第五号住居址（第一八・一九図，図版第六）

**規　模**　北壁のW－X間は3.5m，南壁のY－Z間は3.4m，西壁のW－Y間と東壁のX－Z間は同じ長さで4.2mを測る．竪穴のプランは長方形を呈し，面積は15㎡前後である．主軸方位N22°W．壁は崩落せずほぼ垂直に立ち上がっており良好な壁面がうかがわれる．壁高は約45～48cmを測るが，Zコーナー付近は39cmと幾分低くなっている．これは確認時にローム面を削りすぎたためであろう．Zコーナー寄りの東壁から炉址の北端方向に幅30～50cm前後，深さ15～18cmの浅い溝が入り，北壁の手前でとまっている．

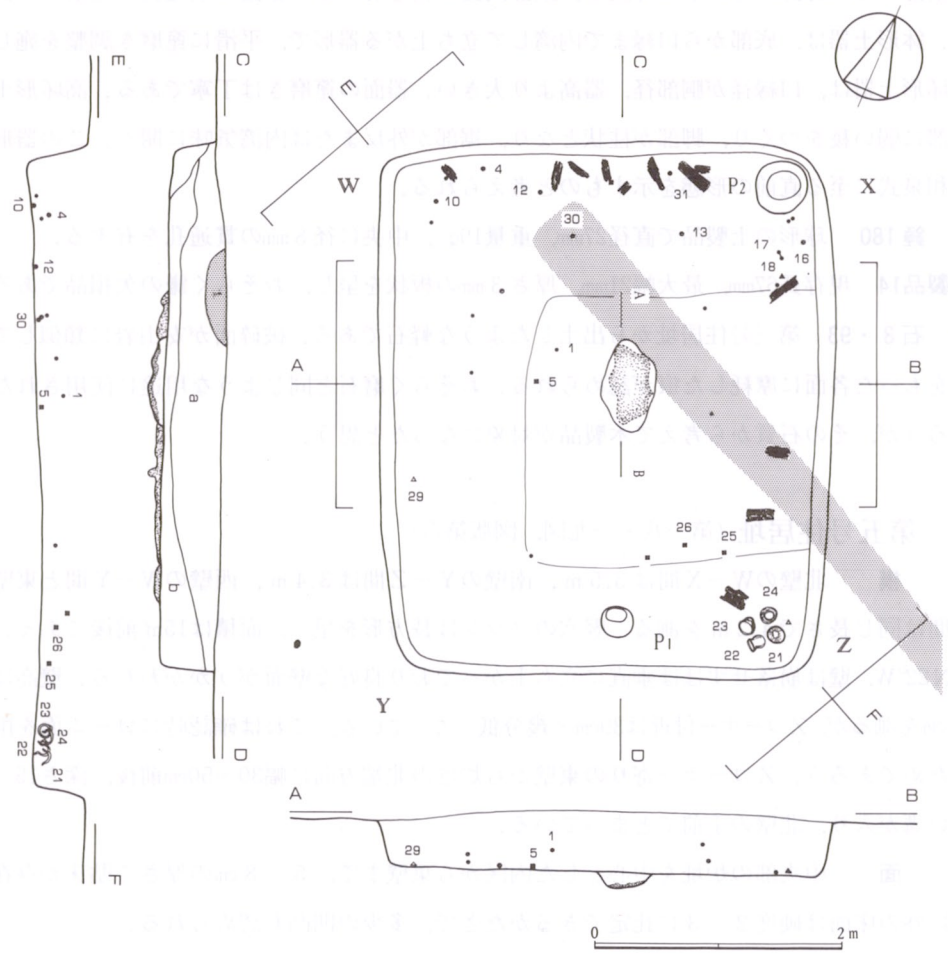
**床　面**　中央部の炉址を中心とした内区から東壁まで，5～8cmの厚さで貼床が存在する．それ以外の床面は硬度2～3に比定できるかたさで，多少の凹凸も認められる．

**ピット**　Xコーナーと南壁に近い床面上に2本検出した．$P_1$は直径25cm，深さ60cm，$P_2$は直径40cm，深さ23cmを測る．$P_1$は柱穴的役割を果したか不明である．$P_2$はコーナーに近いという位置から判断してあるいは貯蔵穴に利用されたかも知れない．

**炉　址**　ほぼ中央に位置する．長径73cm，短径44cmの不整楕円形を呈し，11cm程掘り込んだ地床炉で，炉床は3～5cmの厚さでブロック状に焼土化している．

**埋没土**　層序は2層に区分できる．床面に堆積した暗褐色土bには，ローム・焼土・木炭粒子を僅かに含んでいる．その上に黒色土aが被覆する．埋没土砂の中に焼土や木炭粒子が混入することは，自然的に凹地に流入したものでないことは明確である．

**遺物の出土状態**　南壁のZコーナーの床面に壺形土器，坩形土器，高坏形土器の坏部がまとまって出土した以外は，非常にまばらに散在し，完形土器を含む遺物の総数は僅かに33個を数えるにすぎない．床面または床面近くから出土した遺物は，上記の一括土器群，接合資料1，土錘7個，砥石などであり，他の土器破片を含む遺物は，ドット・マップが示すように出土レベルが




第一八図　第五号住居址実測図

高くなる．縄文土器と石鏃は本址に直接関係のない混入遺物である．

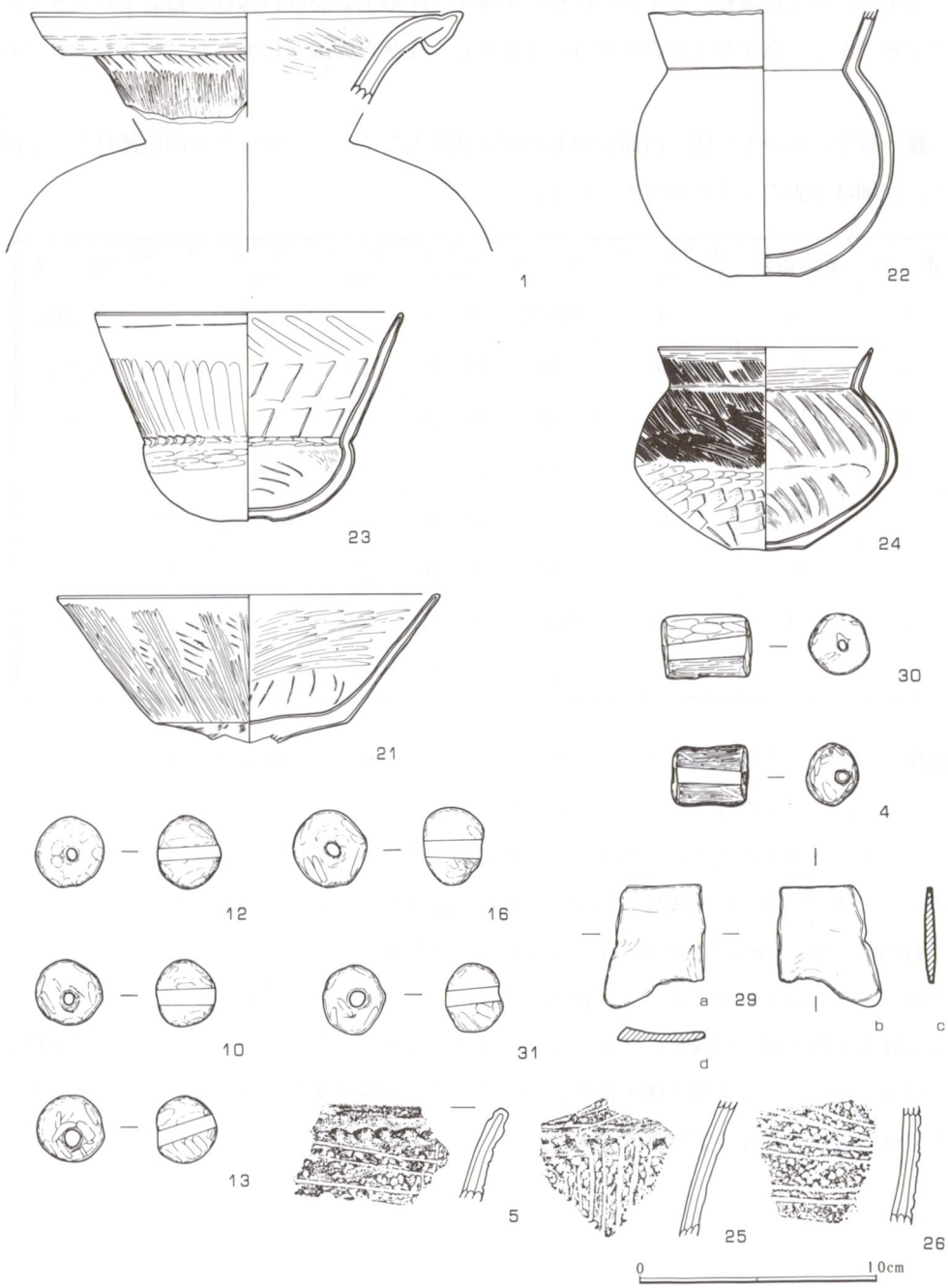
また，北壁と東壁に沿って，長さ15～30cmの細い炭化材が，床上４～20cm（６cm前後が多い）の間（暗褐色土中）に12本認められた．これは住居の廃絶後，暗褐色土が若干埋没した段階で焼却されたものであろう．

接合資料はＸコーナー付近において下記の１例が抽出できた．

接合資料１〈甕　形　土　器〉17▽２・18▽３（胴　部）

**遺物の概要**　種類は土師器，土錘，板形土製品，砥石，自然石と混入遺物としての後期縄文土器破片５個，石鏃１個などである．

**土師器**　器種には小形の壺形土器，坏形土器，高坏形土器などがセットとなって存在する．壺形土器22は，小さな底部に球形の胴部がのり，くの字に屈曲して口縁が開く．篦磨きを行った器




第一九図　第五号住居址出土遺物実測図

面に赤彩が薄く残る．同24は，やや扁平で横に膨らむ胴部から，くの字に屈曲して口縁に至る．器面は上半部に刷毛目調整，下半部に篦整形を施す．坏形土器23は口縁径が器高より大きく，篦磨きが丁寧である．高坏形土器の坏部21にはおそらく柱状の脚部が付加されていたものと思われる．

**土　錘**　球形のものが6個，円筒形のものが2個出土している．現行の漁網用錘具と全く同一である．詳細は下表のようにまとめられる．

| 番　号 | 遺物番号 | 床上レベル (cm) | 形　状 | 大きさ (mm) | 厚　さ (mm) | 円　孔 (mm) | 重　量 (g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 8 | 4 | 略円形 | 28×27 | — | 6 | — | 欠損品 |
| 2 | 10 | 0 | 同 | 23×23 | 25 | 7 | 19 | 完形品 |
| 3 | 12 | 0 | 同 | 30×28 | 27 | 5 | 19 | 同 |
| 4 | 13 | 3 | 同 | 28×27 | 25 | 7 | 19 | 同 |
| 5 | 16 | 0 | 同 | 33×31 | 25 | 6～7 | 24 | 同 |
| 6 | 31 | 0 | 同 | 29×26 | 23 | 6 | 20 | 同 |
| 7 | 4 | 13 | 円筒形 | 29×24 | 22 | 5～6 | 24 | 同 |
| 8 | 30 | 2 | 同 | 35×26 | 26 | 5～8 | 34 | 同 |

**土製品**　方形・長方形に割れた土器片で，その割れ口（断面）を直線状に磨りへらしている．磨耗の部分は，一辺または二辺に加えられるものから，各辺にまでおよぶものが認められる．破片は5.5×4.5㎝前後の大きさである．出土数2個．付近の遺跡での類品は，那珂湊市山崎遺跡の古墳時代に属する第三号住居址（昭和63年6～10月調査）からも4個出土している．

**砥　石29**　現存長50㎜，幅40㎜，厚さ4㎜の大きさを有し，a・bの両面に使用痕をとどめている破損品．石質は千枚岩であって，宮田川・鮎川下流域産のものを利用している．

**縄文土器5・25・26**　口縁部5には指頭圧痕を伴う紐線文を1条めぐらし，胴部は縄文粒子の大きい斜縄文地に，並行条線を横・縦位に施している．後期中葉の加曽利ＢⅠ式に比定できる．拓影未収録の破片も同様の文様構成である．

# 第五章　第三調査区の遺構と遺物

## 1　第一号土壙（第二〇・二一図，図版第七）

第10トレンチの南東端近くに位置している．本土壙の規模は，長径2.42m，短径1.48mの長方形で，主軸（長軸）方位はN18°Wを示す．確認面から底面までの深さは約70cmで，壁面はロームで底面から約40cmまでほぼ垂直に掘られ，確認面に近づくにしたがい，ゆるやかに外傾して立ち上がる．底面はほぼ平坦で，かたくしまったロームである．

埋没土は2層からなり，下層はローム粒子とローム・ブロックを含む黒褐色土b，上層は黒色土aに区分できる．

土壙内においては，底面から土器や土製品の類は全く出土せず，中央付近（A－Bセクション）の南側と北壁寄り，さらに西側の確認面付近から5個の前期および後期の縄文土器破片が発見されているが，これらは断面図で窺われるように，土壙内に埋置した状態を示すものではなく，埋没土砂中に包含されていたものである．

出土土器は，胎土に繊維を混入した前期の花積下層式3と後期の堀之内1式1・2・4・5に分かれる．

## 2　第二号土壙（第二〇・二一図，図版第七）

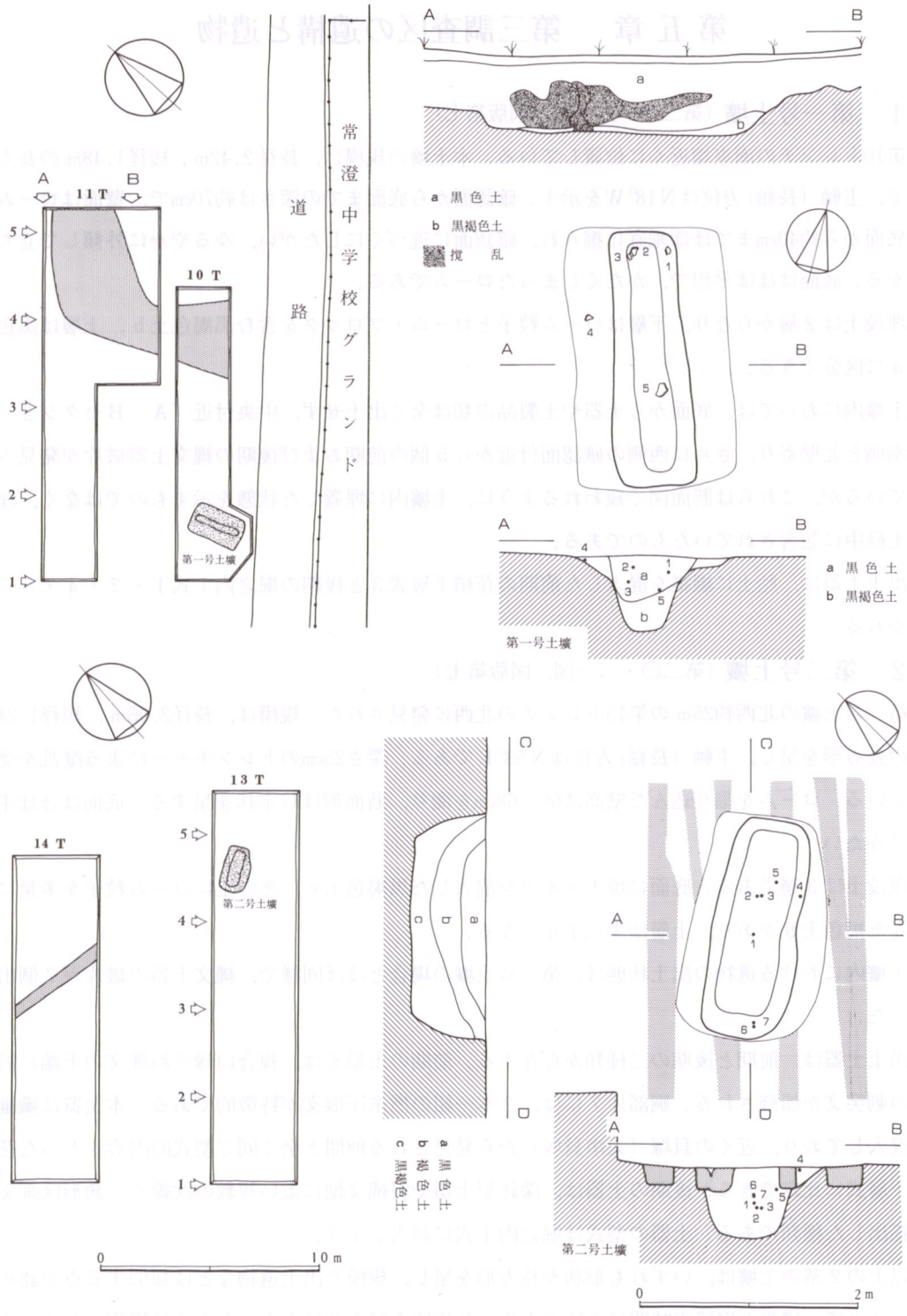
第一号土壙の北西約25mの第13トレンチの北西に発見された．規模は，長径2.06m，短径1.24mの長方形を呈し，主軸（長軸）方位はN53°Eである．深さ25cmのトレンチャーによる撹乱を受けている．ロームを掘り込んだ壁高は66～68cmを測り，断面形はU字状を呈する．底面はほぼ平坦でかたい．

埋没土は3層である．底面に焼土・木炭を混入した黒褐色土c，その上にローム粒子を多量に含んだ褐色土bがあり，上層は黒色土aとなる．

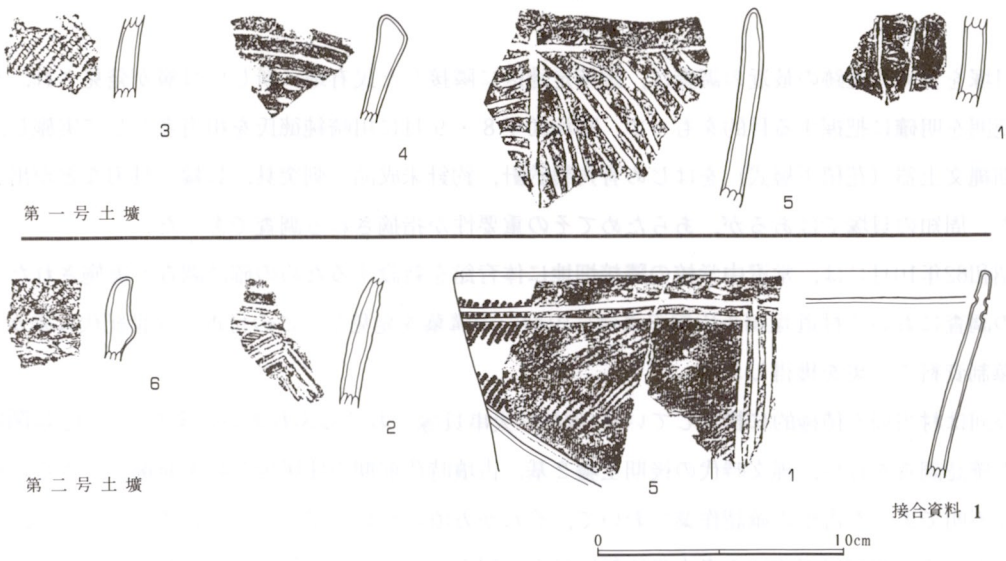
土壙内における遺物の出土状態は，第一号土壙の場合とほぼ同様で，縄文土器の破片が7個出土した．

出土土器は，前期と後期の二種類が存在する．前期の土器6は，複合口縁で斜縄文の下端に斜めの刺突文が加飾される．胴部片7には，2本一組の撚糸圧痕文が特徴的である．本土器は繊維を混入しており，近くの貝塚（大串貝塚）から発見される仲間と全く同じ型式的内容をもった花積下層式に比定できる．後期の土器は，深鉢形土器で斜縄文地に太い複数の沈線で三角形区画文を描出した種類である．土器の型式は堀之内Ⅰ式に該当しょう．

以上の2基の土壙は，いずれも形状が長方形を呈し，規模や出土遺物などは類似する点が認められるので，構築と廃絶の時期にさほど大きい年代的な隔たりはなかったように推察される．土壙の年代は，出土遺物の内容から考えて，おそらく後期前葉の頃と想定して大過ないだろう．




第二〇図　第三調査区遺構分布図・第一・二号土壙・周溝実測図




第二一図　第一・二号土壙出土遺物拓影図

## 3　周　溝（第二〇図）

第一号土壙の東側約20ｍの付近は，本台地の東端に当り，急崖を呈して水田（標高3.0～3.5m）に移行するような地形となっている．この台地縁にはかつて古墳らしい墳丘（標高15.5m）が存在していたという話もあるので，第10トレンチを設定して確認を行った．その結果，両トレンチの東端ローム面下に幅3.0～3.5m で方形に巡る深さ約80cmの溝を検出した．溝の内側は，ロームを主体とした黄褐色土が１ｍ近い高さに残存しており，墳丘の一部を形成する土砂と考えられる．

本確認地点（11Ｔ）の東南側は，農道があり，さらに常澄中学校のグランドとして削平され，すでにこの建設工事で破壊されていることは確実である．したがって，今回の確認調査は，周溝と思われるコーナー部分の調査に終り，周溝の規模までは残念ながら追求できなかった．

以上の調査結果は，不十分ながらも低い墳丘を積成した小規模の方墳が存在していたことは事実であろう．なお，南側の道路（村道塩ヶ崎小山線）を隔てた台地の南縁，約300ｍほど離れた地点には長福寺古墳群，西方の稲荷神社の裏山に大串古墳などが散在する．こうした古墳群との関係は今後の課題となるが，おそらくその一部を構成していたように推察される．

# 第六章　まとめにかえて

貝塚を含めた遺跡の最近の調査は，国指定地区に隣接した民有地に新しい貝層が発見され，その範囲を明確に把握する目的をもって，昭和60年８・９月に川崎純徳氏を担当者として実施し，前期縄文土器（花積下層式）をはじめ骨角製釣針，釣針未成品，刺突具，貝輪，貝刃などが出土した．周知の貝塚ではあるが，あらためてその重要性が指摘される調査であった．

昭和62年10月には，常澄中学校の隣接畑地に体育館を新設するための確認調査が実施された．この調査において村道塩崎小山線の東側に円形の周溝墓を発見し，この付近の５世紀代にかかわる墓制資料の一斑を獲得した．

今回は村当局が積極的に推進している(仮称)『大串貝塚におけるふれあいのまちづくり』に関係した確認調査を行い，縄文時代の後期土壙２基，古墳時代前期の住居址５軒を発掘し，さらに存否が不明であった古墳の確認作業において，それが方墳の形状を呈するらしいことが判明し，本村はもちろん那珂川下流域の考古学的新知見を一層あきらかにすることができた．

そうした調査の内容については，すでに記述してきたとおりである．けれども竪穴住居址の中で，特に第三号住居址の埋没土のありかたは，種々の問題点が含まれていると思う．

本住居址の床面においては，ほとんどの外区全周に厚さ10～20cmの焼土層（灰や炭化物も混在する）の堆積がみられ，しかも内区より壁面寄りが厚くなっている．また，部分的ではあるが床面が煉瓦状にかたく焼土化している所もある．この状態は通常の火災住居とあきらかに相違する．廃絶住居の凹地を利用して燃焼または焼却した跡のように考えられる．最近の発掘例では，那珂湊市山崎遺跡，水戸市薬王院東遺跡などでも，本址と同様の状態が確かめられている．日常の生活用具である土器は，非常に破損しやすい土製品であり，これの補充はしばしば行わなければならない．竪穴の凹地はまさに絶好の燃焼場所であって，不用な物を焼却したというよりも，焼土の堆積量や性状などを考慮すると，土器焼成のために使った疑いが強く感じられる．

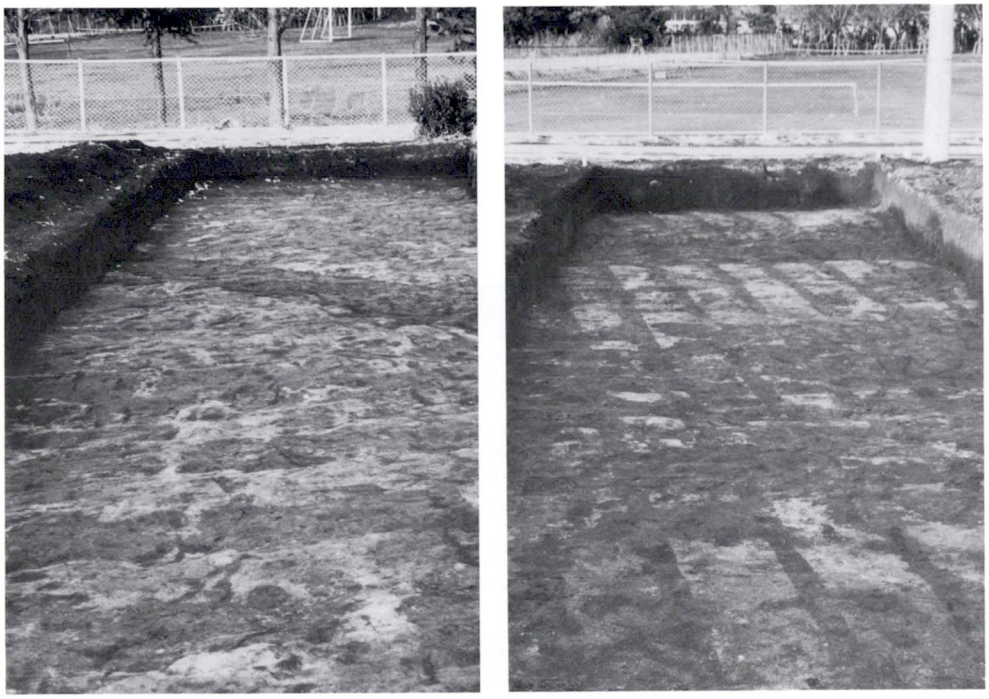
各住居址から出土した土師器は，いわゆる古墳時代前期に該当する土器群である．各器種の中で高坏形土器の器形的特徴は有効な編年の指標に使われる．そこでその特徴的内容を抽出するとすれば，坏部・脚部・裾部の中で問題となる部位は脚部の形状である．これはすでに指摘したように，形状が柱状を呈し長くのびて，中膨みの傾向さえも窺われ，和泉式に移行する直前の姿とみてよいだろう．こうした高坏形土器をはじめとする他の器種を総合すると，本住居址群は４世紀終末～５世紀初頭に営まれたものと考えられる．

方墳については，昭和50年３月に調査した大六天古墳（５世紀代）があり，さらに新例を追加することとなった．本村の古代史解明に新資料が提供でき，大変有意義な調査であったと思う．

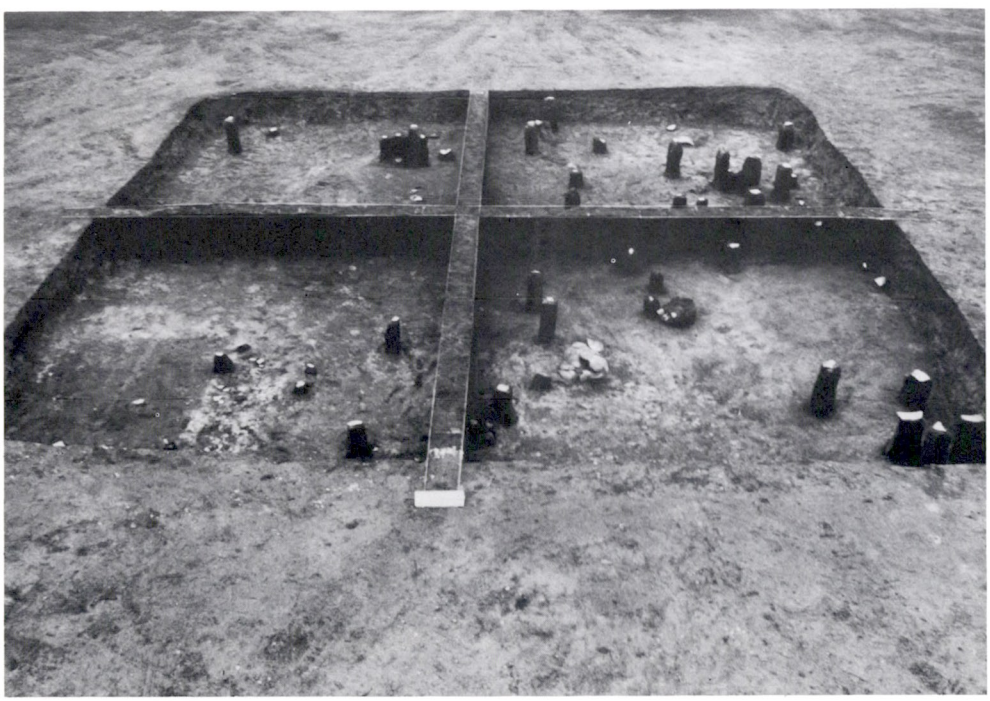
末筆ながら常澄村教育委員会の諸氏に厚い感謝の意を表する次第である．

遺跡の遠景〈南より〉

遺跡の現状〈西より〉

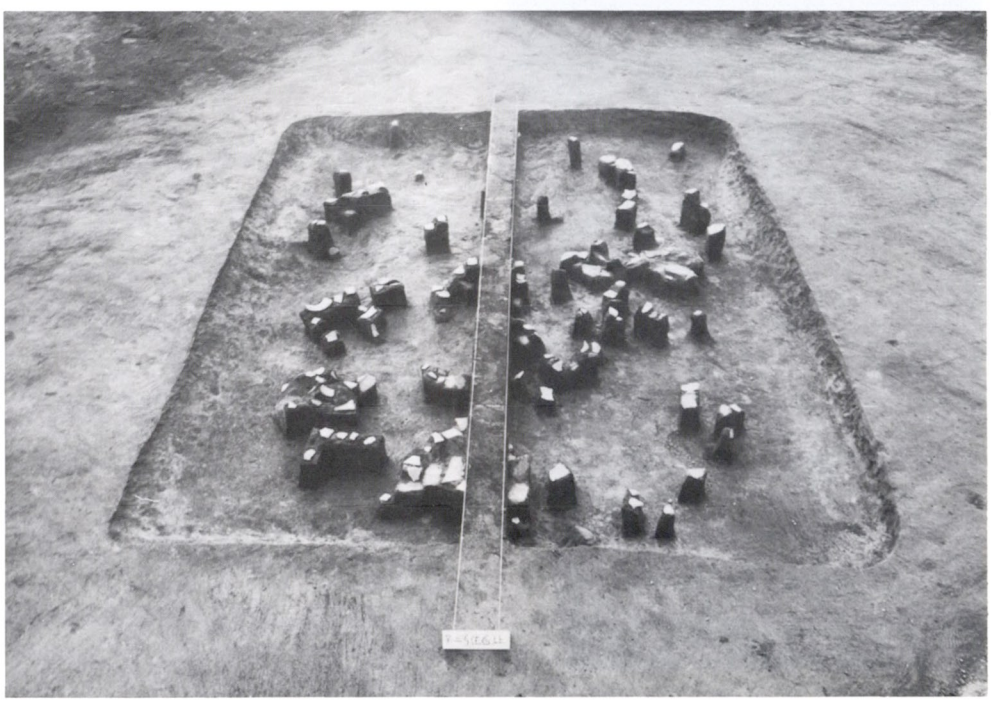


第一調査区トレンチ（左：１Ｔ，右：４Ｔ）の撹乱状態〈南より〉

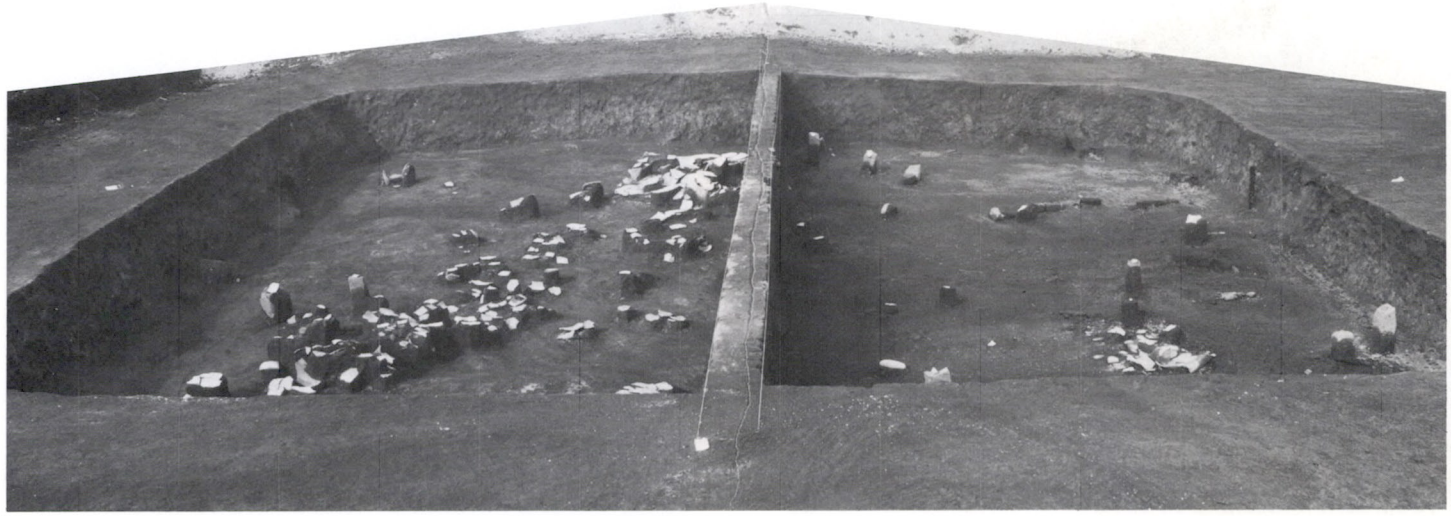


第一号住居址遺物出土状態〈北より〉

第一号住居址管玉出土状態

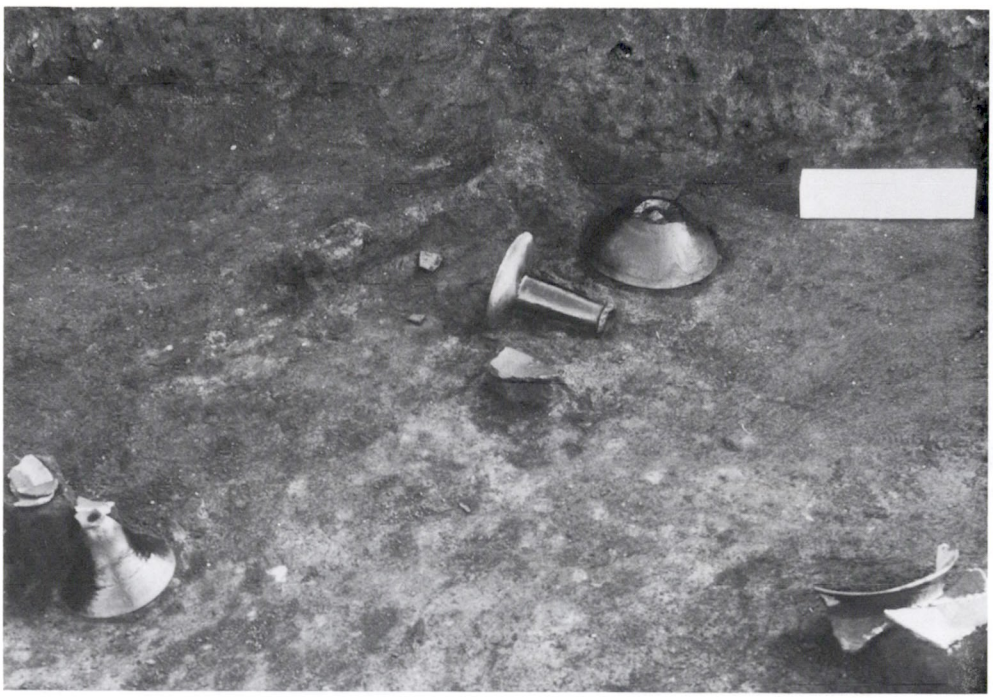


第二号住居址遺物出土状態〈北より〉

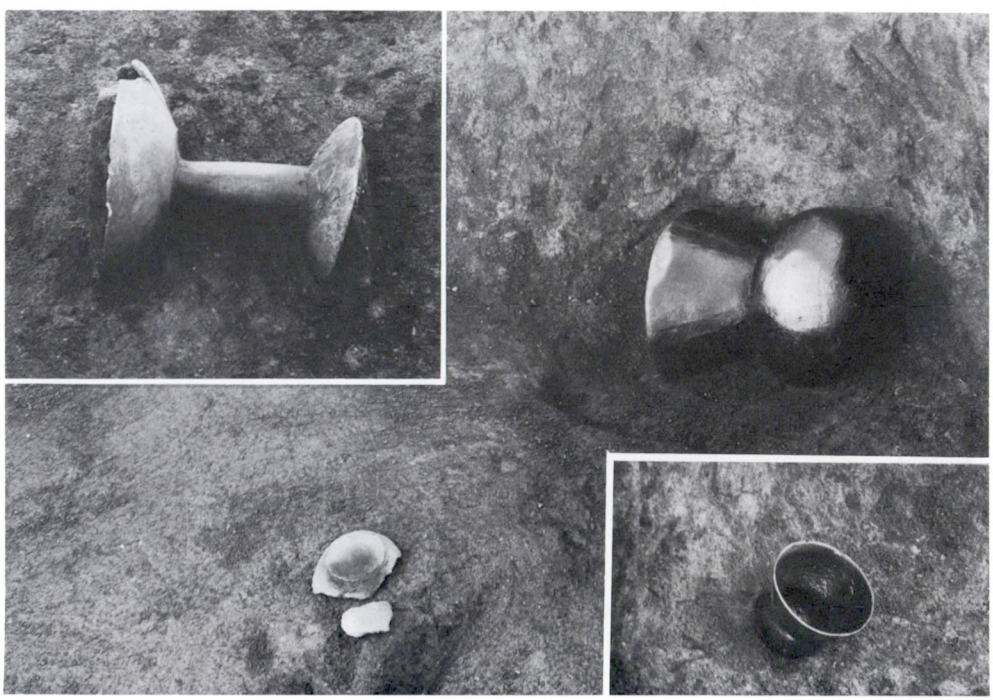


図版第四

第三号住居址遺物出土状態〈南東より〉



第三号住居址遺物出土状態〈北より〉

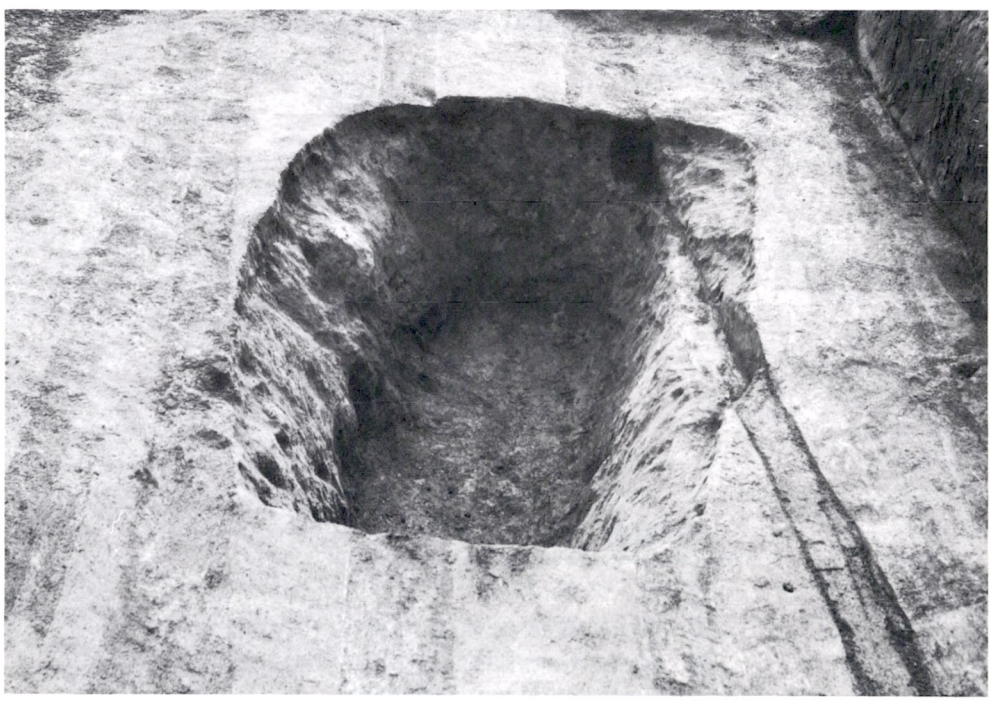


第三号住居址土器出土状態

第五号住居址遺物出土状態〈北より〉

第五号住居址土器出土状態〈西より〉

第三調査区　第一号土壙全景〈南より〉



第三調査区　第二号土壙全景〈北東より〉

**常澄村大串遺跡発掘調査関係者**

中村　　政　　教育委員会教育長

清水　正夫　　教育委員会社会教育課長

吉川　英一　　教育委員会社会教育課係長

宮崎　賢司　　教育委員会社会教育課主幹

飛田　邦夫　　教育委員会社会教育課主事

**発掘作業関係者**

井上　義安（発掘担当者）

大芦　あさ　　水谷　　正　　小堤　静江　　鈴木　浩子（調査補助員）

大場すみ子　　郡司　なか　　蔀　よし子　　富施　綾子　　渡辺　敬子　　渡辺　恵子（作業員）

**整理作業関係者**

井上　義安　　水谷　　正　　小堤　静江　　鈴木　浩子　　富岡　清子　　富施　綾子　　渡辺　敬子

渡辺　恵子

本報告書は，井上義安と水谷　正，小堤静江，鈴木浩子が中心となって作成した．印刷予算の関係で，考察と写真図版の大部分を割愛している．

**大串遺跡**

発　行　平成元年十月

編　集　常澄村教育委員会

印　刷　ワタヒキ印刷株式会社